

表紙, 目次, 雑纂, 抄録, 漫録, 通信

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/38424

明治四十二年六月二十七日發行

十全會雜誌

第五十四號

（非賣品）

全澤醫齒學專門學校十全會

十全會雜誌第五十四號目次

○原著及實驗……………自一頁

○蛙ノ「グロゲン」含量及蛙肝臟ノ定量的成分ニ就テ(原文)

特別會員 加藤 寬

○肺結核早期診斷ニ就テ……………特別會員 米村吉太郎

○雜纂……………自一八頁

○大腦ノ重要ナル回轉及裂溝ノ位置測定法ニ就テ……………特別會員 石川喜直

○ケフィール Kefir ニ就テ……………(加藤教授講話 講話部委員記

○レノー氏病ノ一實驗……………特別會員 蘆澤 孝治

○抄錄……………自二八頁

○直腸ト腋窩ノ体温ノ差異ノ臨床的意義ニ付テ……………

○十二指腸虫液溶解作用……………

○癩癩ノ療法……………

○急性骨髓性白血病ノ一例……………

○急性虫様垂炎初期ニ於ケル血液中ノ中性細胞……………

○腸ニ於ケル炎症性腫瘤……………

○猩紅熱經過中ノ虫様突起炎……………

○慢性虫様垂炎ノ假面型……………

○腹腔内臟ノ疾病ト誤認セラル、筋痛及痙攣ニ付テ……………
○チストプリンノ治療價值ニ付テ……………
以上十項 齊藤房治抄

○漫錄……………自三四頁

○夏季旬集……………

○夢の語……………吉田芳二

○四年級會紀行……………翠流

○通信……………自四一頁

○齊藤義雄君通信○西比利亞鈔道旅行日誌在民賢河合齋君○獨乙短信羽根田、河合の兩君より

○會報……………自五〇頁

○叙任及辭令其他○鬼頭教授を迎ふ○小原講師を送る○本校記念式○三宅博士の講話○十全會講話會例会記事(第四十六回)○十全會講話會例会記事(第四十七回)○十全會講話會大會記事○十全會講話會例会記事(第四十八回)○第三回陸上運動會○弓術部射初式の記○柔道大會○劍道部記事○下平教授の轉居○金澤醫學會ノ設立

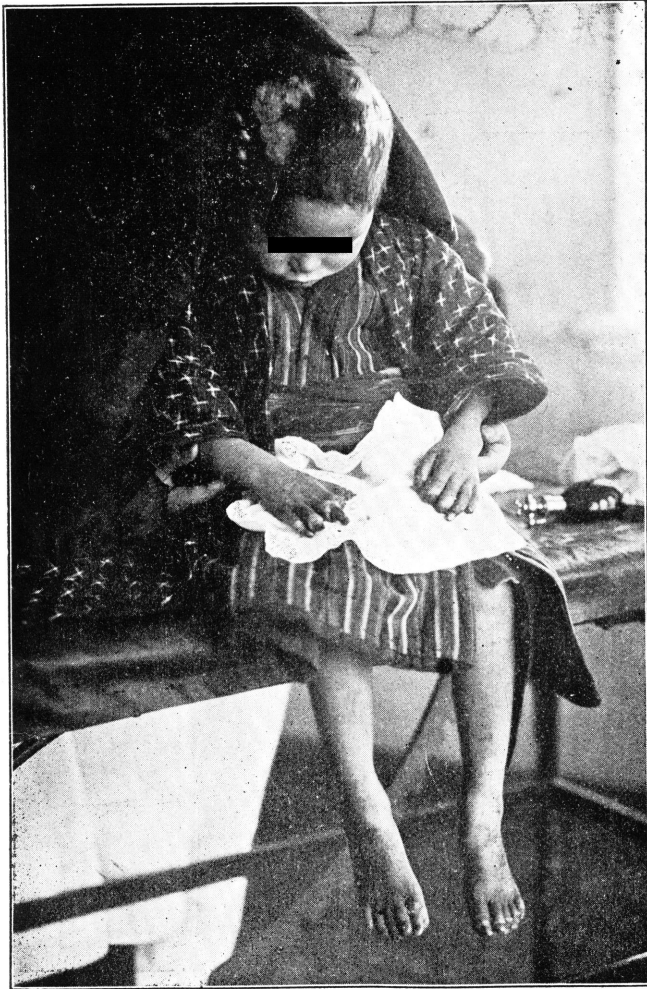
○會告……………自八一頁

○寄贈ヲ受ケタル雜誌及書籍○十全會々費納付調

○廣告

○數件





例一ノ病氏一ノレ
才六某崎宮

雜纂

○大脳ノ重要ナル回轉及裂溝ノ位置測定法ニ就テ

特別會員 石川喜直

大脳ノ主要ナル回轉及回轉ヲ隔ツル溝ヲ外皮ノ上ヨリ測定スルハ臨床家ニ取リテハ緊要ナル事項ノ一ナレバ隨テ之ヲ講究スルモノ數多アルハ自然ノ結果デアアル、然シテ現今專ラ賞揚スル處ノモノハ Krölein 氏法デアアルガ之トテ完全無缺ノ良法ト云フ次第デモナイ比較的良ト云フニ過ギヌノデアアル吾國ニ於テハ能勢博士四分法ナルモノヲ制定シテ官報六九三四號ヲ以テ公ニシタ見ルニ甚ダ簡單デ頗ル面白キ考案デアアル氏ハK氏法ト比較シテ曰ク予ガ四分法ハ最良最簡ニシテK氏法ハ日本人ニ適シナイガ四分法ハ日本人ニハ殊ニ適スル法デアアルト書カレタ、予

ハK氏能氏二法何レカ正確デ且ツ便利デアアルカラ二三ノ頭蓋ニ付テ試ミタノデアアル、素ヨリ予ガ實驗トテモ小數デモアルカラ誤認ガナイトハ斷言シナイガ能氏ノ言フ所ト異ナリタル結果ヲ見出し且K氏法ノ一線ニ改良ヲ加ヘタナラK氏法ノ寧ロ能氏法ニ優ルト云フコトヲ斷言スルコトノ出來ル結果トナツタ、故ニ予ハ以下前二氏ノ法ヲ列舉シ次デ予カ此二法ヲ比較シタル方法ヲ述ベ最後ニ改良ヲ試ミタル一線ヲ述ベテ識者ノ教ヲ乞フト思フノデアアル

K氏法ハ頭蓋ニ七線ヲ畫シ正中裂、側裂、中硬腦膜動脈前後枝ノ結紮部ヲ測定シ同時ニ E. V. Bergmann 氏ノ頭蓋切除術ヲ行フベキ部位ヲ示定スルモノニシテ

第一線 基礎線 (Orbital line) ハ下眼窩緣ヨリ外耳門ノ上緣ヲ經テ後方外後頭結節ニ達ス

第二線 上水平線ハ基礎線ト竝行ニ上眼窩緣ヨリ後方ニ引キタル線

第三線 前鉛直線ハ顴骨弓ノ中央ヨリ上水平線ニ達ス

ル線

第四線 中鉛直線ハ下顎關節ノ中央ヨリ上水平線ト交叉シテ上方ニ引キタル線

第五線 後鉛直線ハ乳頭突起ノ後縁ヨリ上水平線ヲ貫キテ上ル線ニシテ其交叉点ヲBト名ク

第六線 ローランド線ハ上水平線ト前鉛直線ノ交叉点Aヨリ後鉛直線上端ト交叉スベク後上方ニ引キタル線

第七線 ジルビ線ハA点ヨリ後上方後鉛直線ノ第六線交叉点トB点ノ中央ニ至ル

能氏四分法ハ單ニ正中裂及シルビ裂ヲ測定スル法ニシテ

第一 眉間ヨリ頭側ヲ周リ後頭結節ニ達スル水平線

第二 眉間ヨリ頭蓋ノ中央ヲ昇リ後頭結節ニ達スル正中線ヲ畫シ其中点ヲM点ト稱ス

第三 地平線ヲ四分シ其界点ヨリM点ト結合スル三線ヲ設ケ其線ヲ二分シ三個ノ分界点ヲ得、地平線上ノ分

界点ヲ前方ヨリ第一点第二点第三点ト名ケ三線上ノ分

界点ヲ第四第五第六点ト名ケタリ

而シテ第一点ノ後方一仙迷ノ点ト第六点トヲ一線ニヨリテ結合シタル線ハチルビ裂ニ一致シ第一点ト第二点トノ中間線ヲ二分シ其分界点XトM点トヲ結合スルハ正中溝ニ一致ス此線ハ第五点ノ前方約一仙半ノ部ヲ走ル若シ此距離異ナルハ更ニ其前方XYヲ連結シ取テM点ト結合スルノ要ナシ

以上ハ両氏測定法ノ要領デアル扱テ頭蓋ノ骨縫合ト腦ノ溝及回轉トハ一定ノ關係ヲ有スルコトハ人ノ知ル處デア、即チ側裂ハ蝴蝶骨小翼ノ後縁ヨリ始マリ初メ外方ニ進ミ次テ後方ニ轉シ大翼顛頂骨及顛顛骨鱗狀部ノ會合点ニ至レバ分岐シテ前後ノ二枝トナル即チ額骨弓ノ中央ヨリ上方四仙迷ノ所ニ在ル前枝ハ短ク前上方ニ走リテ冠所縫合ト交叉ス、後枝ハ長ク初メ鱗狀縫合ニ沿ヒ殆ト水平ニ後走シ次デ少シク彎曲シテ後上方ニ走ル、正中溝ハ下顎關節ノ上方五仙迷ノ部ヨリ後上方ニ向テ斜ニ走リ上端ハ乳頭突起後縁ヨリ鉛直ニ引タル線ト正中線トノ會合点ニ於テ半球上縁ニ達ス、此点ハ又冠處縫合ヨリ後方五仙

迷ノ部ニ當ルノデアル之等ノ關係ハ常ニ試ミテ破格ヲ見
出サナイノデアルカラ確實ナル關係ト見テ良ト思フ、尤
モ之ハ屍体ニ附テ骨面ヲ現ワシ始メテ檢シ得ルノデ治療
家ニハ適セナイカラ前記二氏等ノ方法モ案出サレタノデ
アル、

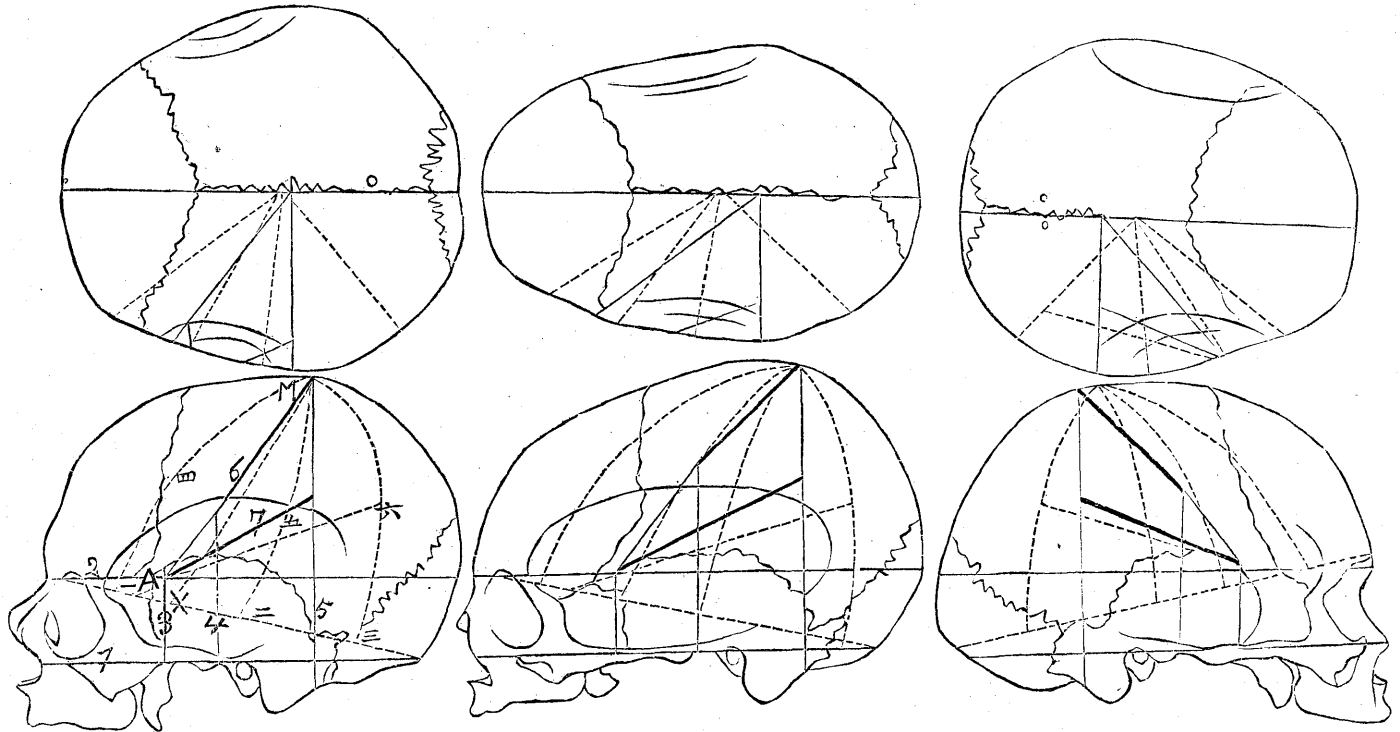
今ヤ自分ハ金澤醫學專門學校解剖教室ニアル骨格中最
短、最長及中頭蓋ヲ撰デK氏能氏兩氏ノ線ヲ畫キ縫合ト
ノ關係如何ヲ試ミ別ニCunnigham'sche Methodeニヨリ
製シタル標本ニモ二種ノ色糸ヲ以テ二氏ノ線ヲ引キ御覽
ニ入レル詳細ハ圖ニ付テ御覽ヲ乞フノデアル、
圖ニ付テ御覽ノ通り三種ノ頭蓋ニ畫キタル線ニ就テ正中
溝ヲ示シタル線ハ兩氏トモ殆ト一致シテ居ルト云フテモ
良イ、勿論多少ノ差異ハアル、而レモシルビ線ハ能氏ノ
線ノK氏線ニ優リタルヲ見ルノデアル、其他ノ点ニ於テ
ハK氏法ノ不便不都合ヲ發見セザルノミナラズ仍ホ二溝
ノ限界ヲ示スコト、中硬腦膜動脈ニ對スルトレバーンア
ンクト、ベルクマン氏切除術ノ位置ヲ示ス等ノ特色モア

ル故ニ予ハK氏法ノシルビ線ニ改良ヲ施サバ寧ロK氏法
ノ用ユベキモノナルヲ認ムルノデアル、

扱テ其改良ト云フハ上水平線トローランド線トヲ切半シ
ラジルビ線ヲ畫クトアルヲ上水平線トローランド線ノ角
ヨリ後鉛直線ノ中間へ一線ヲ畫キ之ヲシルビ線トスルノ
デアル、

終リニ一言スルノハ(一)能氏ハK氏法ハ短頭ニ疑ハシク
長、中頭ニ適スト書カレタレモ然ラザルヲ見ル、(二)能
氏法ハ簡單ニシテ計算記憶ニ便ナリト云ハル、モ予ガ見
ル處デハK氏法ニ於テモ同様デアルト思フ(三)歐人ハ多
ク中顱日本人ハ多ク短顱ナリト書カレタレモ足立博士ノ
報告日本人頭蓋八九ノウチ長十二中四三短二三(人類學
會雜誌一六二號)トアリ、金澤醫學專門學校助手中野氏
ノ報告ニヨレバ一一八ノウチ長四七中四四短二七(十全
會雜誌四九號)トアルヲ以テ見レバ日人ノ頭蓋多クハ短
ナリトハ思ハレナイノデアル、(終)

能氏 K 氏兩線ヲ畫キタル長中短三個ノ頭蓋(實線ハ K 氏線假線ハ能氏線)



短 顱 (長廣示數 89,8)
六十六歲男

長 顱 (長廣示數 65,9)
七十九歲女

中 顱 (長廣示數 76)
四十九歲女

○ケフィール Kefir ニ就テ

加藤教授講話
講話部委員記

Kefir ハ一名 Milchblautwein 又ハ Milchwein ト稱シテ
牛乳ヨリ作リタル飲料デアリマシテ、其外觀ハ牛乳ト異
ナルコナク、味ハ「アルコホル」及炭酸ヲ含有スルヲ以
テ牛乳ヲ嫌フ人トカ或ハ病人等ニハ其飲ミ口ガ非常ニ宜
シ、其滋養効力ニ於テモ遙カニ牛乳ヨリ優リ、消化力モ
牛乳ヨリ數倍宜シト謂フコトデアアル。

原 料

此 Kefir 飲料ヲ作ル原料ハ Kefirkörner ニテ黄色ノ hart
ナル恰ンド Erbsengröße Klumpchen デアル即チコノ
Körner ヲ以テ牛乳ヲ醗酵サスノデアアル、
此 Kefirkörner ノ中ニハ Saccharomyces minor, Bacillus
subtilis, 及 Bacillus acidi lactici 等ヲ含有シテ居リマシ
テ此等ノ Pilz, Symbiose ガ Kefirgährung ノ Grundlage
デアアル、

醗 酵

此醗酵作用ハ二階段ニ分レテ、最初ハ Säuregährung ヲ
ナシ牛乳中ノ乳糖ノ一部分ヲ乳酸ニ變化スル、此乳酸ハ
牛乳中ノ Kasein ヲ非常ニ細カナル Flockchen トシテ
Gerinnen スルノデアリマス、他ノ一部分ハ Acidalbumin,
Hemialbumose, Pepton トシテ lösliche Form ニ變化シテ
居リマス、第二ニハ Kefirhefe ニ依テ乳糖ヲ「アルコホ
ル」及ヒ炭酸ニ分解ス而シテ乳糖ノ一部分ハ變化セズニ
Kefirmilch ノ中ニ止マツテ居リマシテ Fett, コノ Kefir
製造ニハ影響シマセヌ。

製 法

製法ハ、コノ黄色ノ Klumpchen 50 gr ニ就テ一 Liter ノ
十五度乃至二十度ノ微温湯ヲ注ギテ三十時間程放置ス、
然ルトキハ此 Klumpchen ハ膨脹シテ來ル、而シテ其處
ニ注ギタル湯ハ非常ニ黄色ニ染マル、其處デ上液ヲ傾瀉
シテ取り除キテ又二十度位ノ水ヲ注ギテ、廿四時間放置
シテ置ク、之ヲ二三回繰返ストキハ此 Klumpchen ノ色

漸々 Weislich ニナツテ來ル、今度ハ之ヲ Feinen Siebe
ノ上ニアケテ二三回蒸留水ニテ洗フ、然ル後此ノ Krum-
pfchen ヲ Kolben ニアケテ、之ニ $\frac{1}{2}$ —1 Liter ノ極ク新シ
キ牛乳ヲ加ヘテ、廿四時間放置ス、此ニ用フル牛乳ハ煮
沸シテ sterilisieren シタ牛乳ヲ用フルガ宜シ、 roher Milch
ヲ用フルト他ノ有害ナル Pilz ガ其處ニ ansiedeln シマス
カライケナイガ、之 Peptonisierende Eigenschaft 及 Hemi-
albumose ヲ作ル時間ガ早クナツテ來ル、

二十四時間内ニハ屢振盪シテ、廿四時間ヲ經タラ細カイ
漉布ニアケテ、幾度モ冷水ニテ洗ヒテ Kasein ヲ取除ク、
之ヲ一週間モ繰返スト、始メハ「コルベン」ノ底ニ沈ンデ居
ツタ Pilz ガ表面ニ浮ンデ來ル、而シテ不愉快ノ Käsiges
Geruch ガ消失シテ外觀ガ黄色ニナル、之レヲ振盪シテ
Knistern スレバ Gährung ガ起ツタ証據デアツテ、直ニ
之ヲ漉布ニアケテ水ニテ洗ヒ、又殺菌牛乳ヲ加ヘテヤル
此法ヲ二三日間續ケテヤルト、Pilz ノ浮ブコトガ前ヨリ
早クナツテ廿四時間ヲ經ルト凝固シテシマウ、是ニ容積

ノ三倍程ニ殺菌牛乳ヲ注ギテ、廿四時間程十八度ノ温ヲ
保タシメテ放置ス、ソシテ前ノ通り一時間毎ニ振盪ス、
之ヲ漉布ニアケテ之ヲ「ビール」ノ空瓶ニツメテ瓶ノ内
容ノ三分一程トシ、三分ノ二ハ他ノ殺菌牛乳ヲツメテ之
ヲ「コルク」デ栓シテ針金ニテシバリテ之レヲ十五度位ノ
Lufttemperatur ニ放置シテ二時間毎ニ振盪シテ後放置シ
テ置クト八乃至十日ヲ經テ飲料ニ供スルコトガ出來ル、
味ハ少シ酸味ヲ帶ブ

是ニ用ヒタル Keimkörner ハ幾度モ用ヒルヲ得二三ヶ月
間貯ヘントスルトキハヨク水デ洗ヒ Sonnenlicht ニテ乾
燥シ trocknen Schrank ノ中ニ貯ヘテ置クノデアル、
之ヲ用フルニハ温湯ニテ和ゲテ殺菌牛乳ヲ加ヘテ醱酵サス
ベシ

分析ノ結果ハ左ノ如シ、

Wasser	88.8
Gesammt N.	3.3
Kasein	2.8

Albumin	0.735
Acidalbumin	0.25
Hemialbumose	0.19
Pepton	0.04
Fett	2.7
Milchzucker	1.0
Alkohol	0.85
Asche	0.65

○レノ一氏病一實驗

特別會員 盧澤孝治

本病ハ成書ニハ稀ナリト記述セルモ余ハ始メテ本病ニ接シ現ニ入院加療シツ、アルヲ以テ茲ニ報告セントス

雙對性窒息及脱疽ハ發作性ニ一種固有ナル血行ノ變調ニヨリテ大抵左右對側ニ發生シ終ニハ局所ノ壞死ヲ來ス所ノ疾病ニシテ一千八百六十二年レノ一氏ノ始メテ發見シタルモノナリ次デホ、ネク、ツイス氏等ノ記載報告アリ

其他實驗諸例ノ報告往々見ル所ニシテ又我國ニ在テモ本

病ノ報告記載ハ諸雜誌ニ散見スル所ナレバ餘リ僅少ノ疾病ニモアラザルモノノ如シ

抑モ本病ハ今日ニ於テ尙ホ未タ其ノ本體ハ頗ル漠然タルモノニシテ其果シテ獨立ノ疾病ナルヤ否ヤハ未定ノ問題ニ屬スルガ如シ或者ハ進行性麻痺、脊髓癆、脊髓空洞症、微毒脊髓神經結締組織增殖症等ニ於テ雙對性ニ來ル所ノ脱疽ニ對シテ尙ホ此名稱ヲ與フルモノアレモ、ワイス、モンロー氏等ハ他ノ疾病特ニ心臟疾患ノ有無及ビ血管系疾病ヲ精査シテ異常ヲ認メズ通常左右對等ノ部位ニ發スル壞疽ニ此ノ名稱ヲ冠シツ、アリテ血管運動神經ノ中樞癱瘓ニヨリテ壞死ヲ起スモノナリト說キビートル、ウエーヤル氏等ハ神經ニ炎症變化ヲ認メタリト又アウフレック氏ハ末梢神經ノ頽敗ヲ見タリト即チ神經炎說ニシテヘンリー、ロルレストン、ペアルソシ氏等ハ動靜脈管内膜炎說ヲ稱ヘリ今其ノ何レノ說ガ適切ナルヤ頓カニ斷言スルヲ得ズ或ハ相互ノ關係ニヨリテ起ルモノナルヤモ計リ難シ

本病ニ罹ル者ノ男女両性ニ關シテ成書ニヨレバ婦人ニ來ルコト多ク體質ノ軟弱ナル其一素因ナラント然レトモ我國ニ於テハ男子ニ付キテノ報告多キガ如シ血統上ニ關シテハ詳カナラズ同胞中ニ見タルノ例アリ部位ハ指趾ニ最多ニシテ次テ耳翼、鼻、頰部等ノ如キ刺戟ヲ被ル多キ露出部ヲ侵ス本病ノ誘發ハ傳染病特ニ窒扶斯、間歇熱、實扶帝里、寒胃、外傷、糖尿病、肺病、梅毒特ニ梅毒ハ親密ナル關係ヲ有シ本病ヲ起スニ必要ナル素因ヲ與フルモノ、如シ又鞏皮症トハ合併シ來ルコト多シト稱ス其他精神ノ興奮過劇運動等ハ其ノ補助原因タルモノ、如シ年齡ハ一定セズ生後二十ヶ月ノ嬰兒ニモ來リ亦胃癌ノ如キ老人ニ現ハル、病ニモ合併ス

父職業農 宮崎 某 六歲

血族關係 兩系祖父母中父方ノ祖母ハ產褥ニ夭死シ母方ノ祖父ハ高齡ニ達シテ天壽ヲ全フセリ他祖父母ハ健存ス父母ハ共ニ壯健ニシテ嘗テ花柳病等ニ罹リタルコトナシ同胞トシテハ一弟健存ス

已往病歴 患者生來強壯ニシテ四才ノ時胃病ノ爲一週間位臥蓐セシノ外疾病ニ犯サレタルコトナシ

今ヨリ五十日程前即チ昨年十一月下旬ヨリ原因ノ認ムヘキナクシテ精神悒鬱遊戯スルコト尠ナク食慾モ稍減退セリ次テ十數日ノ後下肢ニ輕痛ヲ訴ヘ(左右何レナリシカ不明)歩行ヲナサス次テ兩足蹠ニ疼痛厥冷及ヒ特ニ癢痒ヲ訴ヘ切リニ癢痒緩解ノ爲ニ搔爬ヲ乞ヘリ次テ十日ノ後ニハ(十二月中旬)兩手掌ニモ同様ノ感ヲ訴ヘリ其當時皮膚ニ變色アリシヤ否ヤヲ注意セサリシ但シ尿ハ時々赤酒樣ノ色ヲ呈シタルコトアリ十二月下旬ニ至リ指趾ノ爪甲ハ暗紫色ヲ呈シ指趾ノ尖端ハ暗赤色ヲ呈シ此變色ハ漸時指趾ノ根部ニ向テ進行シ激痛ノ爲メ日夜啼泣シ殆ト安眠スルコトナク加之十二月下旬ニハ兩顛頂部ニ疼痛アリ炭黑色ヲ呈スル乾性痂皮ヲ生シ剝離シテ潰瘍ヲ形成セリ一月月上旬ニ至リテハ兩耳輪暗紫色トナリ同様疼痛ヲ訴フ

現 症

體格榮養共ニ中等ナルモ皮膚一般ニ輕度ノ貧血ヲ呈シ顔

貌苦悶ノ狀ヲ現ハス瞳孔反應通常舌ハ中等度ニ灰白色ノ
 苔ヲ被リ諸反射機異變ナシ肺及ビ心臟ニ理學的異常ヲ認
 メズ腹部モ亦然リ撓骨足背動脈共ニ正調ニシテ通常ノ彈
 カヲ有ス

左右足趾ハ殆ント全部趾根部ニ至ル迄デ暗紅色ヲ呈シ腫
 脹シ趾運動ヲ營マズ

手指ハ各指皆末端ヨリ中節部ニ至ル迄デ暗赤色腫脹ヲ呈
 ス此變色ハ末端部ニ於テ黑色ノ度最モ高度ナリ腫脹ハ瀾
 邊性ニシテ病變部ニハ著明漸次手部ニ至ル迄デ腫脹セリ
 而シテ中節部ハ大小透明或ハ膿性ニ溷濁セル水泡ヲ形成
 セリ左右脚趾ニモ小水泡ヲ存セリ

顛頂結節部ハ右二錢銅貨大左五厘銅貨大ノ殆ント圓形ノ
 潰瘍ヲ生ゼリ各潰瘍ハ膿性分泌多量其ノ邊緣ハ赤色ニ腫
 脹シ灰黑色乾性結痂ヲ附着シ軟膏交換ノ際皮膚ハ易ク共
 ニ除去シ得ラレ潰瘍ハ此ノ狀態ヲ以テ増大セリ

兩側ノ耳輪ハ紫色ヲ呈シ指壓ニヨリ褪色ス

經過 大畧ヲ摘示セバ

一月廿六日 水泡ハ増大シ變色部ハ黑色ヲ著明ニ帶ビ乾
 固ノ傾ヲ呈セリ体温三十七度七分脈膊一二〇、

一月卅日 水泡ハ破潰潰瘍トナリ變色部ハ乾固シ鉛黑色

トナリ中樞端ニハ分界線ヲ生ジ綳帶交換ノ際右第二指ハ
 第二節ニ於テ自然脱落ス自發痛大ニ減退シ一二時間ノ安

眠ヲ得ルニ至レリ体温脈搏等大差ナシ

二月十日 左右手指各二本分界線ヨリ落離ス足趾ニアリ

テハ壞死皮膚ハ囊狀ヲナシテ除去シ得タリ頭部潰瘍ハ漸
 次癒痕ヲ以テ縮少シ右側ノモノハ殆ント全治セリ耳輪ノ
 變色ハ全ク消失セリ (卷首ノ挿圖參照)

二月二十日 發病來歩行不能タルモ二三日前ヨリ二三歩

ヲ歩行スルコトヲ得食欲可良トナリ此日試ミニ左右足部
 ヲ冷水中ニ五分間浸シタルニ頭部癒痕ハ赤色ヲ呈シ各指
 ノ炎症ハ増悪セルモ加温ニヨリテ減退セリ

三月五日 各趾指ハ分界線十分ニ發生セルヲ以テ全身麻

醉ノ下ニ殘居セル壞死部ハ悉ク除去ス

尿ハ入院來濃厚褐色タルコトアリタルモ化學上時ニ僅微

ノ糖及蛋白ヲ見タルノミニシテ血色素ハ更ニ證明シ得ザリシ

療法 特種療法ハ一ツモナク海濱又ハ山地ニ轉居シ勉メテ神經系ノ興奮ヲ避ケ滋養強壯療法ヲ與ヘ驅黴療法等ヲ行ヒ局處ニハ溫浴、溫濯法、按摩法、電氣療法等ノ外ハナシ壞疽ニ對シテハ手術的療法ヲ施ス
今爰ニ蛇足ヲ顧ミズ成書ニ記載セル症候ヲ畧記シ余ノ例ト比較參考ニ供セン

本病ノ初潮ニハ消化障害精神悒鬱、全身ノ違和欠伸等アリ時ニ熱發惡寒ヲ加フルコトアリ次テ本病ノ特徵ヲ呈シ來ル即チ左右對側ノ部位ニ於テ局所失神次テ局所窒息ヲ起シ遂ニハ局所ノ壞死ヲ形成スルモノニシテ此病變ハ發作性ニ反復シ主トシテ指趾ヲ襲フモノナリ其發作ノ來ルヤ對側的ニ蟻行感、冷感或ハ癢痒感ヲ訴ヘ患部ノ皮膚ハ蒼白色或ハ却テ暗赤色ヲ呈シ厥冷シ知覺異常及知覺鈍麻等ノ局所失神症候ヲ呈シ皮膚浮腫運動亦自由ナラザルニ至ルコトアリ而シテ此等障礙ハ茲ニ止マリ一定時ノ後全

ク消失シ或ハ數回發作性ニ反覆シタル後早晚消失シテ治スルコトアリ又ハ一二ヶ月依然トシテ病症動かズ此レニ次クニレノ一氏病ノ所謂第二期ニ移行ス即チ患部ニ劇痛ヲ發シ且ツ暗赤色ヲ以テシ更ニ進ンデ濃藍色若クハ暗紫ニ變ジ局部ノ腫脹ヲ呈シ大小水泡ヲ生ズ即チ局所窒息ナリ此ノ如ク失神ニ次テ窒息ヲ來スヲ普通トスレトモ失神期ヲ先驅スルコトナクシテ窒息ノ現ハル、コトアリ此時期ニ於テ亦何等障礙ナク消散シ或ハ再ビ同一ノ部位或ハ他ノ部位ニ反復スルコトアリ窒息期久時存スルカ又ハ極度ニ達スルヤ患部壞死或ハ一局部ニ圓形ノ乾性腐痂ヲ形成シ血樣内容ヲ滿テル水泡ハ潰爛ス此等壞疽ノ深淺大小固ヨリ一様ナラズ淺表性ニシテ眞皮ノミナルアリ皮下組織ニ至ルアリ本患者ノ足趾ノ如ク或ハ深部ヲ犯シ全患部ノ脱落アルアリ手指ニ於ケルガ如シ

本例ノ類症鑑別ヲナサンニ足部前膊動脈ノ搏動著明ナルヲ以テ栓塞性脱疽ニアラザルハ明カナリ尙ホ閉塞性動脈內膜炎性脱疽ニモアラザルハ明ナリ又動脈硬變ヲ認メザ

ルガ故ニ畸形性動脈内膜炎性脱疽ニモアラズ其ノ他糖尿
 病性脱疽麥角中毒及癩病ヲ除外シ來レバ本例ハ恐ラクハ
 レノ一氏病ナルベシ本病ハ寒冷ノ時期ニ密接ナル關係ヲ
 有シ手指、足趾、耳翼、鼻尖ノ如キ身體ノ末端ヲ犯シ局
 所ニ紫暗色ヲ現ハシ多少ノ腫脹水泡ヲ認メ疼痛ヲ誘發シ
 凍傷ニ由テ生ズル貧血及鬱血狀態ノ其レト一見能ク髣髴
 タリ然レモ其症候ノ發作性ニ反復スルモノ是レ決シテ凍
 傷ニ實驗セザル所ナルノミナラズ冷足試驗ヲ行ヒタル時
 半及頭部ノ癩痕暫時ニシテ赤色ヲ呈シタルガ如キハ亦以
 テ寒冷ト密接ナル關係ヲ有シ凍傷ニアラザルヲ證スルモ
 ノニ非ラズヤ既往症ニ於テハ本患者ハ發作性血色素尿ヲ
 合併センガ如ケレモ入院以來未タ其ノ發作ヲ見ズムラッ
 一ク氏ハ甚ダ頻繁ニコレヲ見ルト云ヘリ余ノ例果シテ發
 作性血色素尿アリトセバ其原因トシテ第一ニ疑フベキハ
 遺傳毒ナリ然レモ既往竝ビニ現症ニ於テコレヲ證セズ
 終ニ臨テ恩師宮田教授ノ懇篤ナル指導ニ對シ感謝ノ意
 ヲ表ス

(明治四十二年三月中旬稿)

抄 録

○直腸ト腋窩ノ體溫ノ差異ノ

臨床的意義ニ付テ (殊ニ腹膜炎ニ付テ)

Dr. Pnopping 氏ハ先ツ Madelang, Lemander, Schüle-

Liebermeister 等諸家ノ說ヲ記載シ次デ自己ノ實驗上左

ノ結論ヲナセリ

一、直腸ト腋窩體溫ノ異常ニ大ナル相違ハ健體、熱病患
 者共ニ腋窩體溫ノ低度ナルニ因ス

二、兩處體溫ノ差異ハ筋肉内ニ於ケル溫形成ノ大サニ反
 比例ス

三、兩處體溫ノ大ナル差異ハ凡テノ熱性病者ニ來ル、腹
 膜炎ニ於テハ重症ナル症例ノ約半數ニ來ル

四、腹膜炎ニテ此差異ノ大ナルハ豫后上重篤ノ意味ヲ有ス
 尙氏ハ腋窩體溫ハ往々錯誤ヲ來スニヨリ熱性病者ニハ直

腸檢温ノ必要ナルヲ説ケリ

(Münch. med. W. S. No. 10. 1908)

〇十二指腸虫ノ血液溶崩作用

Paris 大學ノ助手 P. Prell 氏ハ同地方ニ於ケル本病患者ニ綿馬エキス又ハチモールヲ投ジテ得タル便中ヨリ虫体ヲ集メ流水ニテ注意シテ充分洗ヒ清メ生理的食鹽水ト共ニ臼中ニテ碎磨シテ中性ノ混濁セル液ヲ得該物ヲ以テ試驗ヲ行ヒ此ノ物質ガ血液溶崩ノ作用アルコトヲ證セリ其ノ結果得タル所ハ次ノ如シ

- 一、十二指腸虫ハ血液溶崩性物質 Haemolytische Substanz ヲ有シ該物質ハ人間、犬、家兎、牛、南京兎、等種々ノ動物ノ血液ニ作用ス
- 二、血液溶崩物質ハ生理的食鹽水ニ溶解セズ故ニ碎磨シテ得タルズスペンジオンヲ濾過スレバ殘留ス此物ハ容易ニ酒精、依的兒ニ溶解スベシ
- 三、此ノ血液溶崩物質ハ煮沸ニ對シ抵抗強ク煮沸セル水

浴中ニ三時間置クモ其ノ作用ニ影響ヲ受ケズ又其レ以上ノ溫度ニ遇フモ變化ナシ

四、レチン (Leithin; Riedel) ヲ加フレハ眞ノ Leithinbildung ヲ起スコトナクシテ其ノ作用強盛ス又ヒヨレ

ステアリンハ此者ヲ中性トスルコトナシ

五、トリアピン消化ハ血液溶崩物質ニ關係セズ而シテ之ヲ水ニ可溶性トス

六、十二指腸虫ノアルコールXハトリアチツシユ及ビアチツトリアチツシユノ性質ヲ有セズ

以上ノ事實ニヨレバ十二指腸虫ハ血液溶崩物質ヲ有スル一確實ニシテ該物質ハ宿主ニ起ル貧血ト密接ノ關係ヲ有ス而シテ今迄其ノ証明ノ遅レシハ該物質ガ上記ノ性質ヲ有セシニヨルナラント

Prell 氏ハ該物質ヲ以テ Kirschmann 及ビ Morgenroth ガ臟器越幾斯中ニ又ハ Tallquist ガ裂頭蟻虫ニ發見セル及ビ Weinberg ガ Skretostomen 中ヨリ發見セルヘモリジン等ノ屬スル彼ノ Laidoid gruppe ニ屬セシメタリ

(四第 No. 9. 1908.)

○癩癩ノ療法

Meyer 氏ハ本病療法トシテ食餌ニ注意シ牛乳食又ハ牛乳ト植物性食餌ヲ與ヘ肉類ハ只少許ノミヲ取ラシメ就中**ブ井ヨン**、**肉エキス**アルコール、茶、コーヒーヲ避ケシメ其傍水浴法ヲ試ミタリ藥物ハ臭素劑ヲ最上トシ臭素那篤留謨ヲ六、〇迄用ウルヲ適當トセリ但シ若シ臭素劑効ナキハ阿片臭素療法 Opium-Bromkur ヲ初ム此際阿片ハ初メ一日三回〇、〇五ヨリ初メ漸次増量〇、九ニ達シ次テ急頓ニ六、〇ノ臭素劑ヲ以テ之レニ代ユベシト

(Therap. Monatsh Nr. 1. 1908.)

○急性骨髓性白血病ノ一例

Benjamin 氏ハ一九〇八年ミュンヘン小兒科學會ニ於テ本例ヲ報告セリ

九歳ノ小兒、蠟様蒼白色、皮膚粘膜ノ出血、骨ノ疼痛、

浮腫及脾肝ノ腫大アリ 血液検査 ヘモグロビン 65%
白血球 2200% 白血球ト紅血球ノ比例 1:160.
其ノ中

8-10 %	atypische granurite
40 %	normale Lymphocyten
50 %	Myeloblasten

顯著ナルハ此細胞ノ殆ド 90%ニ於テ成形原質ニワコーリジールング高度ナリシニアリ

(Munch. med. W. S. No. 9. 1908)

○急性虫様垂炎初期ニ於ケル

血液中ノ中性細胞

Kohe 氏ニモンズ Arnehsche Methode ハ急性虫様垂炎ノ診断及ビ治療ニ必要ナルモノニシテ診断ヲ確實ナラシメ且ツ手術的療法ト待期的療法ノ撰擇ヲ容易ナラシム但シ之ノ血液現象ハ爾余ノ症狀ト相待ツテハジメテ價値アルモノニシテ且ツ標準トシテ茲ニ一定數ヲ示スハ困難ナ

リ是レ該法ハ甚機微ニシテ又検査者各自ニヨリ計測ニ少ナカラザル異動アルヲ以テナリ場合ニヨリテハ該法ハ疾患ノ預後決定ニ付テモ價値アルモノナリ殊ニ手術后本検査ヲ引キ續キ行ヒ中性細胞ノ%數ヲ計ルハ炎症ノ進行及ビ退散又ハ續發膿瘍ノ發見等ニ必要ナリ手術后右血液現象ノ變化進行スルハ合併症ヲ確診セシム可シト

(Centr. bl. f. chir. Nr. 50 1908)

○腸ニ於ケル炎症性腫瘤

H. Braun 氏ハ曰ハク網膜ノ炎症性腫瘤ハ時トシテ腸瘤腫ト酷似シ現今ニ於ケル僅少ノ智識ヲ以テハ屢々癌腫ト思考セラレ切除セラル、程此物ハ腸管ト密接ノ關係ヲ有ス即チ此ノ假性腫瘍ハ大抵發育速カニ且ツ無熱ニ經過シ腸狭窄ノ症狀ヲ招來シ惡液質ヲ呈スルヲアルヲ以テ益誤診シ易キニ到ル氏ハ六十四歳ノ一老婦人ノ上記ノ經過ヲ取り下行結腸ノ癌腫トシテ處置セシガ鏡檢ノ結果始メテ本症ト診斷シタル一例ヲ報告セリ

而シテ該腫瘤ハ再ビ消失スルヲアルハ確實ナリトシ一例ヲ擧ケタリ即チ右腹部ニ手拳大ノ硬固凸凹不正ノ腫瘤アリ上行結腸ノ癌腫トシテ氏ノ許ニ送ラレ來リシ老男子アリシガ患者手術ヲ拒ミ受ケザリシ后九年ヲ經テ之ヲ檢セシニ以前存在セル腫瘤ハ最早証明スル能ハザリシ本症ハ通常手術ヲ行フコトナクシテ治癒スルコト多キモノニシテ手術ヲ行フトスルモ只該ツモールヲ腸管ヨリ割去又ハ腸吻合術ヲ行ヘバ足ルベシト云フ (同誌同號)

○猩紅熱經過中ノ虫樣突起炎

R. Kaufmann 氏ニヨレバ虫樣突起ハ多クノ淋沍組織ヲ有シ猩紅熱ノ經過中常ニ輕重種々ノ炎症機轉ノ部位トナリ種々ノ病狀例之嘔吐其他爾余ノ胃腸症狀ヲ來スモノニシテ殊ニ惡性猩紅熱ニ於テハ著明ニ顯ハル又猩紅熱ノ經過中及ビ全然解熱シタル后ニ於テモ眞ノ虫樣突起炎ヲ起スコトアリ死体解剖ニ於テハ虫樣突起ト盲腸間ノ癒着、粘膜炎症、小出血病竈又ハ虫樣突起内淋沍腺ノ高度ノ

腫脹等ヲ發見シ得可シ氏ハ猩紅熱ノ恢復期ニ於テ腸官能ヲ精密ニ検査スルコトノ必要ナルヲ説ケリ

(同紙第四十四號抄録中ヨリ)

○慢性虫様垂炎ノ假面型

K. Walko 氏ハ慢性虫様突起炎約百五十例(多クハ手術的ニ處置セリ)ノ經驗ヲ有シ本病ガ單ニ急性症ヨリ來ルノミナラズ又全ク徐々ニ潜伏的ニ發生シ得可シトノ論旨ヲ抱持セリ氏ニヨレバ本病ハ全然無痛性ナルコトアリ又臍部、胃部、背部、薦骨部、胸骨部、右側睪丸、S字狀部等ニ疼痛ヲ來シ又ハ帶狀感ヲ起スコトアリテ手術ヲ行ハザル場合ニハ往々ひすてりー又ハ神經衰弱症ト誤診セラル、コトアリ原因トシテ氏ハ中毒及ビ機械的作用ヲ擧ゲ又血中ヲ循環シ居ル細菌毒及ビ腸間膜内ノ血栓性靜脈炎ガ原因トナリウルヲ認メタリ

慢性虫様垂炎ノ經過ハノートナーゲル氏ガ Pseudoparapneudicitis ト稱セル神經病狀群ト誤認セラル、コトアリ又

右側睪丸神經痛、潜伏睪丸、尿道狹窄、膀胱結石、膽石、腎盂炎、腰筋炎等ト誤診セラル、コトアリ
本症ノ繼發症トシテ恐ル可キモノハ附近ノ靜脈血栓ヲ起シ次テ肺栓塞ヲ來スコト又ハ門脈系ノ血栓ヲ起シ爲メニ腸壞死ヲ招來スルコトナリ

又氏ハ腹腔諸内臟ヨリ放散スル刺戟ガ消化障礙、分泌又ハ運動機障害ヲ惹起スルハ凡テ是等ノ刺戟ガ迷走神經又ハ交感神經ニヨリ神經中樞ニ傳達シ而シテ該刺戟ノ性質及ビ持續如何ニヨリ胃ニ亢奮的或ハ抑制的衝動ヲ與フルニヨルトセリ
終リニ氏ハ慢性虫様垂炎ニ於テ切除術ノ合理的ナルヲ説キ且ツ氏ノ例ノ約七十五アロセントハ手術ニヨリ本症ニ伴ヒタル胃ノ分泌運動障害ノ復舊セリト云フ

(同紙同號)

○腹腔内臟ノ疾病ト誤認セラル、 腹筋ノ筋痛及痙攣ニ付テ

A. Schmidt 氏ニヨレバ腹筋ノ筋痛ハ成書ニ示ス如ク稀有ノモノニ非ズ多クハ腹筋ノ緊縮セルキニ起ルモ時トシテハ其ノ全然安靜弛緩セルキニ來ルコトアリ時トシテハ極メテ注意シテ行ヘル輕キ接觸モ尙能ク筋痛ノ原因トナルコトアリ而シテ此際若シ深部ノ過敏存セサレバ腹腔内臓ノ疾病ヲ否認シ得可シ殊ニ粗暴ナル處置ヲ行フニ當リ深部ハ過敏ナラズシテ腹筋ニ疼痛及ビ痙攣ヲ來セバ本病ヲ確診スルヲ得可シト腹筋ノ痙攣ハ内臓ノ充盈狀態ト反對ノ關係ヲ有ス

反對的腹筋痙攣ガ腹筋ノ或ル一部分ニ限リテ起リウルコトハ臨床上大ナル意義アルモノニシテ氏ハ胃潰瘍及膽石疝痛ノ際屢々直腹筋ノ最上部ノミガ單獨ニ緊張攣縮シ其狀恰モ腫瘤ノ如キヲ見タリ又外斜腹筋ノ攣縮モ腫瘤ト誤リ易キヲ說ケリ氏ハ特發性官能的腹筋痙攣ハ殆ド毎常ハ必ずてり性ナリトセリ

(Prager med. W. S. Nr. 41. 1908.)

○チストプリンノ治療價値ニ付テ

Peters 氏ニヨレバチストプリン Cystopurin ハウロトロピンノ鹽類ニシテウロトロピンノ如キ不快ナル副作用ナク且ツ確實迅速ナル作用アルヲ以テ賞用ニ價ス可キモノニシテ尿ヲ酸性トシ且ツ著シキ利尿作用アリ長期持續シテ用ウ可ク泌尿器系ノ種々ノ傳染機轉、急性慢性淋疾等ニ稱用ス可シト氏ニヨレバ用量一日二—六瓦

(外科中央雜誌一九〇八年三十五號抄録ヨリ)

以上 齋藤房次抄

醫家の有すべしもの二つ

曰く智識[◎] 曰く良心[◎]

ヌスバウム

漫錄

○夏季旬集

過ぐる日、予が知人北雷子が、只かりそめのいたづきにて、當金澤病院へ入院の折、東都よりもたらせし句をくばく、猶子が同趣味のものせしあどかいませて凡そ八十。誦むにつれて心自ら長閑なるもわかし。乃ち載せもて避暑のよすがにとこそ(二芳詠す)

梅雨 長旅の梅雨に入りけりころ、汁

橋守に錆錢くるる梅雨哉

五月雨 つゆ晴れや傘たもき風呂歸り

宇治橋や人さまくくにさみだる、

五月雨 さみだれの驛に入りけり早泊り

五月雨や借りてひさしき女傘

五月雨や大津とまりの駕の衆

夕立 夕立や檜のにはふ浮世風呂

白雨や大路荒れくる裸馬

白雨の押行く海の黒み哉

夕立や斧とく水のさゝにこり

夏雲 夏雲や河童死にたる人だかり

北雷

落葉

雅風

潮谷

落葉

柳渚

落葉

北雷

潮谷

御社や鈴ふれば夏の雲うごく

火渡りの行ある寺や夏の雲

雲の峯 物干に蒲團の皮や雲の峰

薰風 薰風や君が烏帽子の左折

青嵐 久米舞の曲破に入るや青嵐

大蛇斬る簸の川上や青嵐

夏野 大石のころがる川や夏の月

夏野 浄瑠璃に浮き名の森や夏の月

夏野 追ついで笠まゐらする夏野かな

清水 両頭の蛇うづめ去る夏野哉

清水 印籠の置き忘れある清水かな

短夜 水晶の念珠をあらふ清水哉

短夜 狛犬に名ある社の清水かな

短夜 短夜の天津かけ抜く飛脚哉

祭 短夜の關の朝寝や富樫殿

祭 顔に似ぬ戀もありけり麥の秋

幟 つゞき繪の軒行燈や夏まつり

幟 一村に源氏のたほき幟哉

田植 仲人の娘見て行く田植かな

田植 久作のた光連れ出る田植哉

川狩 化されて獲物とられし夜振かな

虫干 虫干や貸しなくしたる上の巻

藤里

落葉

片瓦

落葉

潮谷

北雷

落葉

杏華

落葉

杏華

落葉

杏華

雅風

落葉

潮谷

落葉

北雷

杏華

藤里

藤里

遊泳	打水	納涼	青簾	箆	裕	帷子	浴衣	羅	汗	夏瘦	日傘
虫干や一切經に松の風	水泳や町家育ちの懸守り	打水や紀文の店の紺のれん	打水や粗忽どがむる國訛り	橋にして踵をかへす涼みかな	此里の小町も出でぬ門涼み	名物の餅うる家や青すだれ	名所繪や岡崎女郎衆青すだれ	さめ易き蘆生が夢やたかむしろ	竹林や四賢は酒のたかむしろ	素裕や五代目尾上菊五郎	喜三太の弓勢つよき裕かな
帷子や寸にあまりし漆紋	帯めてうしろを撫でる浴衣哉	年下の叔母とつれ立つ浴衣哉	うすものや四條の夜風柳より	汗出れば水に入るなり橋普請	夏やせや若き女のふくみ水	使して戻るお初の日傘哉	清水や京の日傘の片かげに	仮名書きの名刺もてきし日傘哉	開帳や日傘をたゝむ松の下		

潮谷	梅溪	柳渚	藤里	潮谷	落葉	杏華	落葉	落葉	潮谷	落葉	杏華	落葉	北雷	勝仙	潮谷	梅溪	北雷	勝仙	北雷	藍雨
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

扇	團扇	里の花	心太	晝寐	時鳥	鮎	螢	蚊	蟬	水鷄	雷	橘	若葉	若竹	牡丹	瓜					
時宗の元使引き見る扇かな	歌論議に冠者が襟の扇哉	仲人の話立ぎく團扇哉	豆咲くや移民のせたる瀛車の窓	心太風ふかば霧立ちぬべし	先生の孫吳に倦み晝寐かな	子規竹樓に碁をくづす音	鮎釣の小蓑干しけり石の上	うすものゝ袂に光る螢かな	上加茂に伯父の家訪ふ螢かな	七賢の夢安からぬ藪蚊かな	什物の一切經や蟬の聲	蘭台は留守と申すに水鷄哉	雷を怖るゝ僻や富士詣	橘や鞆鼓に長けし院の雅兒	千体の佛まします若葉かな	相阿彌の窓の灯や今年竹	若竹や流れに沿ひて大原まで	物思ふ夕を牡丹崩れけり	よき衣や苺のつゆの紅に	瓜盗人は河童の業ときまりけり	
落葉	潮谷	落葉	北雷	是因	落葉	勝仙	梅溪	北雷	潮谷	藤里	北雷	落葉	落葉	雅風	落葉						

(完)

(漫録)

○夢の話

吉田 二 芳 編

予の夢観は大畧左の如しとは未だ夢學 *Onirologie, Traumlehre* に半歩も入門せざる予の夢中に於ける囁語と知り給へ。さて夢は生理的吾人のよく經驗する所、某氏はこれを以て睡眠中必ず現出するものと説けども未だ信す可からず。已に睡眠に一定の感覺なきが如く夢そのものには一定感覺なし。但し睡眠にては意識全く消失せるに反し夢にては意識状態にありて感覺、知覺、感情、思考力、判斷力を有す。しかも醒覺時の如く確實ならざるは全く半睡眠時に現出するを以て也。換言すれば生理的睡眠の主因たる意識消失、腦血液の性状變化、腦細胞の疲勞及び五官刺戟の休止等が平等に作用せざる時即ち局所的半睡眠、散在性半睡眠、系統的半睡眠等の場合に現出するもの也。而してこれ等の半睡眠は生理的睡眠の前驅象にして、必ずしも常に夢を生ぜざるや明也。然れどもゴルツ氏が手術せし犬の已に大脳、間腦及び左側四疊体の大部分を切除されしに不拘、猶睡眠と醒覺とを區別したるが如き。又四疊体以上の器官を欠損せる或る畸形兒の、猶情緒を表して三十六時間生活せし例を見れば睡眠

の原理及び半睡眠と夢との關係も甚だ複雑なる可きを知る。次に夢を原因上二種に分つ。自發性夢或は心的夢及び他發性夢或は神經刺戟性夢これ也。吾人の夢は多く前者に屬するものにして著明なる例をかの釋尊の見魔とす。嘗て釋迦の成道を妨害せし嬌々鴛鴦の姿、喃喃哀鸞の聲の「形体は好しと雖も其心は端正ならず」と一呵拒斥せらるや、一億八千万の諸鬼天界より下り地獄より上りて迫害をなすこと極めて猛烈、或は大雷を起し熱鐵丸を雨らし劔戟火車交々空中に横へて火箭を燃せりと。心理學はこれを複重人格の條に説明せり。予は今これを以て直ちに夢に適應せんと。即ち顯在性と潜在性とを問はず、凡て吾人の觀念 *Vorstellung* はやがて相類集して第二人格を生じ常に第一人格と闘ふに至る。今もし半睡眠中この人格の争鬪或は暴起を來さんか遂に意識界を刺戟して幻覺を生ず。これ即ち心的夢の原理也。次に神經刺戟性夢とは直接末梢神經の刺戟が求心的に皮質の半睡眠部に傳達せられ、爰に一の追念像を生じ前の如く意識界を刺戟して幻覺を生ずる也。例之睡眠中水を打たれて雨に逢へるを夢み、寢衣の袖を握つて金貨を手にせるを夢むるが如し。猶臥位により或は寢具の壓迫等によりて、宛もストリヒニン中毒の如き病的状態の夢を生ずることあり。所謂「鼠に絞めらる」とはこれ也。次に夢中の精

神状態は概して薄弱よして統一なく偏重的也。殊に判断力思考力に於て然りとす。これ感情のみ比較的強實なれば也。爰に不可思議なるは夢中不確實なる追念作用によつて、嘗而忘れたる夢を追念し、夢則ち夢を見ること也。又夢中の觀念も矢張り偏重的にして理解追究の分子を含有せず。今もし夢中の幻覺が外來刺戟よりも強力なる時は遊睡、嚙語、夢中笑泣を起し、宛も精神病者の如く又被催眠者の如し。爰に於て吾人は觀念力の偉大なるに驚かざるを得ず。次に夢の記憶を三別し單に夢みたるのみにて内容を記憶せざるもの、醒覺の瞬間にこれを記憶するもの及び比較的長時に亘りて記憶するものとす蓋しこれ夢中感覺の強弱と反對的精神作用の有無による。猶夢が男女、年齢、境遇によつて多少異なるは明也。夢占 嘗て三浦博士の「日本の夢占に就て」を讀みしに昔秘露の僧侶は麻酔藥草を以て人爲的に夢みて吉凶禍福を卜し。エスクラピウス神を祭れる寺院にては夢中宣托行はれ僧侶及び病者は新たに屠殺されたる牡牛の皮上に臥して夢みたりと。又支那に於ては已に周禮に占夢官を置き漢丁公は腹に松生すと夢みて位三公に進み、李白は筆頭に花咲くと夢みて詩文の達人となれり。我國の古代にも夢解の職ありて後、陰陽師の掌る所となる。又巫女の如きも種々の方法を盡し人爲的に夢状態に入りしもの

也。今下に占夢の二三を記載せんに「雨に逢ふと見れば酒食に饗せらる」「仁王を夢むれば延命長壽」「盃を夢れば良兒をもうく」等は吉夢に屬し「壁を塗ると夢むれば感冒或は熱性病にかゝる」「醜婦と戯ると見れば頭痛、齒、耳の疾患を得」「井水濁濁すと見れば下肢若しくは生殖器の疾患を得」「動物に追跡せられれば神經衰弱症となる」等は凶夢に屬し、又「上顎の脱齒は父、下顎の脱齒を夢むれば母の死す也」「ろは長命の兆也」等の如きは吉凶何れにも屬す。

迷信 夢合せの故事及び悪夢を除く法等種々あり。かの獏は好んで悪夢を喰ふとて衾、枕、寢具等に畫きしが如し。又万葉集二十卷を通じて夢に關するもの八十五、その中當時の迷信を詠みしもの尠からず。例之「白細布之、袖折反、戀者香、妹之容儀乃、夢二四三湯流」の如し。

○四年級會紀行

翠 流

恰度時計が五時！幹生諸君が飛び乗つたと見たモメント、甲張た汽笛が、朝の寂寞を破つた。途端に、蹠跟としてみたをれかゝる、手を窓に支へて、後れ馳せに來る諸

君もがな、と、頸をなげ出せば、右往左往の車掌が煤けた
面^{おもて}を、無氣力な電燈が、淡く照して居る。プラットホ
ームを離れる。星列幕布せる電燈と、アーケ燈が、暗々
裡に金澤の境界を表彰して居る。宿雨未だ歇まず、風は
いやが上に冷い。車窓を確乎と銷して、默然と腕を拱く。
朝の空氣は清淨だ、朝の車中は純潔だ、肥料臭き赤毛
布も居なければ、脂粉にまみれた虚榮の動物も見ない、
淡泊なる吾們^{われら}一百の青衿のみだ。この無邪氣なる分子而
已を搭せて、朝の列車は進行を續ける。もはや、犀川の
鐵橋も乗り越したろう、然し、瑠璃一重を隔てた窓外は、
密雲昏沌として曉天の星一個の贈をも見ない、只折々火
氣を含んだ煤煙が、一過性に車窓を横きると、凜罐の
喘ぎと、上体の不正なる動搖とのみが、その進行を自覺
せしむるに過ぬのだ。

霏々たる室内、琵琶の低誦あれば、詩の微吟もある、
浪花節の鼻聲も混じる、默考し見ゆる、各種^{あふちか}性格と、嗜
好と、習癖とが、此車中に露はれて居る。

「何んで雨が降つたろう」どの疑問が念頭に涌く。今日
は、三月二十一日……………春季皇靈祭……………、彼岸の中日
……………四年級の最後の級會……………それに、何故雨になつ
たろうと、女性的の卑屈なる考も簇生する。
けれどもそれは瞬時だ。聴診にき、倦きたる耳、鏡見

に見あきたる眼、其の耳、其の眼が、今數時を出ずして、
滌々の美音に傾け、明媚の自然に注ぎうるに思到らば、
吾人が疑懷は、忽、雲散霧消して、快哉又快哉を叫ひた
くなる。

美川を過るや、暗雲漸次その羽翼を歛めて黎明車窓に
迫り、視界漸く披開し、倉ヶ岳の連山は遙か東に沈んで
漣波の如く、銀嶼十里の手取川の正に北海に潮ぐとこ
ろ、清濁の水相争ふて、巨濤細浪萬重の波瀾を作し、咆
ゆるが如く、叫ぶがごとく、右顧左眄に遑なく、列車、
遂に白砂青松の裡に埋没し、所謂小舞子の濱を駛走する
こと多刻にして、展望再び啓いて、能美の曠原となり、
雲鬘を戴ける白山は、深く、群嶺の間に伍して、其麗姿
を眩^{くら}してたる

小松を過ぎ、木場潟の銀鏡を、指呼の間に一瞥を加へ
つゝ、粟津を歴、動橋に到り、凡百の寛兒、戸を排して
出つれば、旭輝双眸に鮮かに、清風颯として上衣をはら
ふ。刻將に六時半。

洒々たる菅笠、揚々たるオパー、蝙蝠傘一本の琉球人
スタイル有れば、破れ外套の牛乳配達風情も交る、三々
五々の行動！動橋を出つれば、濶として江沼の平原だ。
左手に遠く大日山の雄姿を望み、右手に遙か富士寫ヶ岳
の麗容を眺めつゝ、前衛東に向へば、後衛西に進み、後

衛左に廻れば、前衛右に折れ、迂途緋路、徒に、水田萬頃の間を縫ひ、涼々たる動橋川の流、これに隨伴して、微琴を奏でゝれる。

茅屋瓦軒のうち交つた七日市に入る。煤花、猶ほ春の清香を放つて居る。その小路、この露地より、疾り出たる老若男女の、吾人を遇する、恰で、夷狄のやうな目付だ。角帽が變手古に見ゆるのだらう。それでも「先生だ〜」と小さな私語が聽ゆる。振顧れば、豈、圖らんや、髭髯卑しからざる眼鏡君だ。

西島を過ると、左手に、小丘の迫つたる其麓、澁色の建築物が屹乎として秀でゝある。學校？旅館？の疑雲が胸に漂ふ。二十歳位と、十五六恰好の里育ちが、途をさける、今日は彼岸でと云ふのだらう長閑な衣装だ。「山代は………」と聞けば些時躊躇ちゆうちゆうつて「それが………」と、幼少ちゆうせいさいのが諾く。正直に出來たものだ。

泥濘、靴の央を没する、不潔な陰狭な小街を通り抜けると、鳥渡、廣濶なヶ所へ現はれる。温泉の匂ひがパンと鼻神をつく。電気浴場が、其廣き中央に占踞してゐる。左手に「くらや」とある新しい看板が目を惹く。「フウ此館か」と「斗り」、「オイ君時計は」と聽けば未だ八時だとのこと、「それでは山中へまで」との動議が提出せらるゝ。爺媪に揖し、子女を煩して路をもとめ、漸く、郊を出

で、山麓の小徑を辿り、急澗を度り、之と並行して、山狭に入るに及んで、途、益々平夷となり、飛鷹洗ひしが如き蒼穹に當りて、一大圓を描ぎ、心氣爽然として、歩自ら運び、猫岩ねこいわの鮮影、漸く眉目に接するに到りて、絮雲漂然として飛來し、驟雨いたること沛然、しばし郊端に露をまちて山中に入る。

先づ黒谷の勝を窺ふ。梅花の複郁を送らず、櫻花の艶麗を具へずと雖も、しかも、自然の幽遠、俗塵を掃ひ、急澗、踞岩、神秘の面影を藏し。右岸の峻丘を披いて遊園となす、橋を亘りて攀昇する事數十歩、杖をたて、奔流を瞰下すれば、水勢岩に激し、湧泡飛沫四邊に翻りて、蟻走の感が足蹴に起る、

謝して、蟋蟀橋の奇を訪ふ、配崑の妙、布石の趣、遙かに、黒谷を凌駕して、凄陰更に深く、碧流、白濤の、巨岩を吐吞する邊、白華飛散し、喧囂、怒號す、橋邊茶亭あり、席を清めて呼ぶ。「ロハならば………」と云ふ面持、でイ立久しうすれば、吾人の囊底を見透してか、彼、遂に息む。乃ち還る。

馬車停車場に憩ふこと數刻にして、二人の紳士らしき或者が這入つて來た。美姫、後にまどふて、戀々見るにたへざるものあり。糞いまくしい、渠等が散布する不正のゲルドが、矢張この仙境をまでも汚してゐる。

骨立つた驚馬が繫がれる。若し、夫れ、沈々として水も闌けたる厩の夜、蚊鳴、劇しく彼等が老軀を惱しめ、不眠の恨をかこつの時、彼等が瘦軀の精力を絞りて運びし東西幾多の人士が、黄金の前に跪きては、節操弊履の如く、利害の巷に臨んでは、情義瓦石に等しき、浮薄輕動に憶ひ、到らば、潜然として無言の涙に咽ぶてあらう、と僕は思ふた。

禦者の筈が、渠れの發足を促す。皺襞多い皮膚に汗が淋漓として流れる、車体の震動劇しく、お臀の皮膚が剥けさうだ。

河南といに下車し、山代に到れば、すでに午に幾い。悠揚として、藏屋の門を潜れば、先着業已に喧噪を極む。洗足もそこへ、階上に到れば、床上曉鶏の一軸を懸け、三室つき通しの大廣間である。烏鷺に輸贏を争ひ、五月並べに腦漿を搾る、歌留多に青筋たてたる手相。悠々たる湯上りの面々。千狀萬態!

聽て膳が揃ふ、番魚美菜膳上に堆し。箸を把つたかと思つた中に、茶碗が織るが如くに出る、いづれも健啖揃ひだ。「誰れか来て頂戴イ……」と、疝高い御給事姐さんの援聲も徹つたものぢや莫い、「未來のなんとも恁んな時代はあるさ」と、益々ようがる。

膳了るや、粗末なる机子が持ち運ばれる。吾人半環狀

にこれを圍繞し、玆に、第二回の級會が啓かれた。松村君たちて開會を宣し、吾人が學生涯に於ける最後の級會なる旨を述べ、亞で、級長佐々木先生、既約の如く開業學を題し、辭を現代開業法に起し、晩近醫界の風潮を把束し來りて、冷評酷批を下し、進んで、先生が多年の經驗に準據し、過去の實見を引証し、醫が確實なる信用の博利法は、正に、正確なる疾病の診斷にあり、堅牢なる豫後の洞察にあり、治療法の適切にあり、と大斷案をなし玉ひて、吾人が心肝を刺し、最後に吾人は常に細密なる研究心を保持して、一事一物に對し、決して社會の耳目を瞞着すべからざるを宣し給ひ、縷々數千の金言、時餘に亘り、車夫の到るを告ぐるに及んで漸く案を囊中にをさめられた。吾人、將來成功と稱すべき多少の或物をゑたとすれば、吾人は今日の先生が辭句に首肯すべきも尠なからずてあろう。

先生の一瀛車はやく歸らるゝのは實に遺憾だ、しかし御多忙なる先生のことだ。吾人は、尙、悠々幾多残れる趣味を覓めて歸らう。

此館の庭園は狹隘だが、泉水は綺麗だ。鯉魚悠々として去來し、すだれ櫻の影なよ／＼として水の碧を彩つて居る。狭き廊下を傳ひ、右曲左折十餘の階梯を昇れば後庭に現はれる。丘の山腹を啓いて園となし、清泉を築き

て、鯉魚をうかべ、鞆を設けて、人爲に委してある。展望亦佳にして、江沼の山川近く双眸に懸り、紫煙、孤村にたち、白帆碧疊の上を迂り、太陽は、金箭の如き光線を、斜に浴せかけて居る。宛然パノラマだ。館を出でて、萬松園の風光を賞し、歸りて夕飯を喫し、館を出でたつ。道を動橋に辿つた。ガタ馬車に摺れちがつたあとは、暮色益々迫り、はては西山の一角より起りし亂雲の見る／＼天心に達しあとは篠つく雨だ。軍歌の吟聲も黙した。只遙か北方に當りてとぎれ／＼の歡聲が暴風の裂隙を通してものすごく聞ゆる許り。

動橋七時の列車は綿の如き一同をのせて夢と現の間を北へ／＼と急ぐ。(完)

* * * * *

凡診病無論若王侯卿相賤如倩傭
丐兒、皆一視同仁、亦無計恭慢
恩怨、悉心治療

墨 雨 庵

通信

○齊藤義雄君通信 (十全會宛)

拜啓貴會益々隆盛奉賀候
陳は一昨四十年末第一回の會合を催せしに在廣并廣島地方
在任同窓會は今回堀大次郎、今井亥三松、吉田幡誠君等
の熱心なる盡力により第二回の會合を去る一月三十日に
廣島市已斐河畔の河原町萬春園(元上田男爵邸)に開く、
定刻午后四時には豫定の人員に達したれば同庭園の絶勝
の地を撰んで一同紀念の撮影を終り宴に移る、時恰も嚴
寒の季節にもかゝはらず遠近より集ひ來りし芳氏は總て
左記拾四名の多數、即

- 大 江 君 (藥) 淺 野 君 (藥)
- 松 村 君 (醫) 吉 田 君 (醫)
- 一 宮 君 (醫)
- 廣島縣病院の、梶 川 君 (醫) 築 紫 君 (醫)
- 藤 卷 君 (藥) 毛 利 君 (藥)
- 高 本 君 (藥) 堀 君 (藥)

酒精會社の、橋本君(藥)

開業の、今井君(醫)

吳の、小生(醫) (次第不順)

何れも少壯氣鋭、斯の會合に向ては熱烈なる同感の士の一み、配膳と共に今井亥三松君の開會の挨拶、吉田幡誠君の會の経過報告等あり、更に宴半はにして築紫、堀、松村諸氏の、或は斯會に對する抱負なる希望、或は有益なる座談等あり、尙未知の諸氏もある事とて名刺交換など爲し、母校の事とも相談り、時節柄廣島名物の牡蠣料理に舌鼓を打ち、最も愉快に、最も圓滿に、非常の盛會を極めて十時過くる頃各自思ひ想ひに散會せり、斯る盛會は豫期以上にて幹旋の勞を採られし幹事諸氏は言はずもかな、集ひ來りし一同の最も満足せし事と信して疑はず候

就ては今后廣島、吳其他廣島地方に轉住の校友諸氏は其居所を廣島市横屋町今井亥三松君宛御一報せらるゝ様切望す、

因に目下吳、在住の母校出身者は

越田信吉 長井運男

小出貞次郎

の三君にして共に海軍に出仕せらるゝ、

○西比利亞鐵道旅行日誌

在民賢 河合 鷹君 報

十一月七日午前郷里を發し午后一時敦賀に着一先づ熊谷ホテルに落着いた、同旅店にて瀛船汽車聯絡切符購入等の世話、外貨兩替など取計つて呉れるから便利だ、乍併予は大坂より見送の舍弟に大和田銀行迄遣りて日貨を露貨に兩替させ予は親ら海岸通梅田商會出張所に出で、連絡切符も買ひ其他の様子を問ふた本日は露國の義勇艦隊龍門號出帆し宛も大阪の醫師仙石永保氏(岡山醫專校出身)同行する由にて本日出發と決めた、出帆の翌々日午后浦鹽より萬國寢台列車(International train)發車に聯絡する筈にて瀛船汽車共ニ邦貨百四十四圓外に電報料三圓計り仕拂つた一ツの失敗は旅券に内地露國領事の裏書が當地にて出來ると思ひ居りしが敦賀には未だ領事館がない大に困つたが梅田商會より本船の事務長に談じて浦鹽にて日本領事の裏書を頼む様取計つて呉れた之れは常にやる事だそーだ内地にて都合出來ぬ人は此法に依るも宜し

敦賀出帆、午後五時船は煤煙を揚げて出帆す臯頭とデツキの手巾、帽は漸次影を陰くす 船内には仙石氏の他に

英京行の風間機關中佐、佛國行の井上氏其外英米人あり皆同列車の客で大に心を強ふした、敦賀灣を出つれば北風荒る船は動搖を始め予を始め概ね船暈に中てられ「ベツト」に平臥二日間絶食には閉口冬季日本海の航海は不愉快だ、其爲船足遅々

十日正午浦塩港に着いた（豫定は九日正午の筈にて）當日發の萬國寢台列車に合はず已むを得ず浦鹽に一泊することゝした仙石氏は徳永旅館の宿引に案内されて馬車で同館に着した徳永旅館は余り清潔ではないが親切宿泊料も案外高からず先づ一泊四留心付二留位だ

翌十一日領事館に出登して例の裏書を催促したが未だ港務局から廻送せずとて大に閉口し種々通手を求めて漸く正午に出来きた、午后二時に停車場前の列車切符販賣所（驛内にては發賣する所なし）で敦賀で拂ふた上に尙急行割増金九十五留五十哥（邦貨の百圓位）出して列車番號切符も受取り仙石氏は「トランク」を列車に預け予は長さ二尺五寸幅一尺三寸許の鞆と大坂朝日記者八十島氏の注意により密柑箱二箇、其他二個の手荷物を持參して室内の網棚に納めたが今少し大なる鞆の二三個は構はぬ只乗換の時赤帽を二人位要する許りだ室は予と仙石氏と米國人二名の乗合だ（中等室はベツト四個ありて四人詰）併し内地の列車と違ひ廣濶で清潔だから疲れぬ夫れに各

室寒暖計を備ひ常に攝氏十五度を保たし置くから春の様である

午後ハルピン時三時十分（シベリヤ線の各驛はハルピン時とモスコウ時を用ひ居る、時計を持參し居るも何の役にも立たぬ自分の時計は常に狂ひ通した、食堂の時計を宛に其日々に合はせねばならぬ）夕八時「セント、ニコリスカヤ」に着佳なりの驛らしい

十二日、晴天なるも室外随分寒いらしい昨日沿道の汀の海水が氷結し掛けて居る滿目枯燥權木の荒野に寂しく風を受け居る許りで点々小停車場を見る外眞の枯野だ本日「ハルピン」着の筈だから郷里、知己等へ通信の端書を認め同驛より差出す積り午后九時 Harpne ハルピン到着一時間の餘裕があつた石造の大なる驛で内地にては多く見ざる驛だ一体休車驛は概ね十五分間で發車合圖に先づ二点鐘を打ち第二に三点鐘を打ち直ちに發車するから驛内散歩等には二点鐘にて室に戻れば極めて安全だ、ハルピンでは大分下車した客が有りし爲予の室米人は他室に轉じ大に裕となり爾來モスコウ迄占有する所となつた、予の列車は露國政府の急行列車で立派な食堂も連結し居りボーイ等も不都合ではないが只露語の外不通と浴室のない丈が先づ難付けか

列車中の食堂は二人乃至四人宛の卓子を備ひ裕に二十人

を容るゝに足る朝は八時より晝は時間の制限なきも夕は八時にあらざれば食堂内に入るを得ず普通朝食五十五哥、晝、夕食は制限なきも先づ壹留二十哥より一留八十哥位、茶一椀十五哥、加菲一杯二十五哥、ビール三十哥位食用ノ都度ボーイに仕拂ひ其内約一割每回心付として遣はずを法とするのである、露國の料理は肉片巨大で喰多きがあるから注意して誂へぬと度々食む無用の皿が出来來る夫れに献出の「ターフル」が判はぬから知人の英米人等あつたら就て取調べるがよい

十三日、朝梳髮剃顔之れは毎朝遣らされば内地の列車と違ひ夥多の外國人食堂に會するから不体裁の風をなし居ると多少体面に關するから襟、カウズ等も列車内にて取代ふる丈用意するを要する、

午前バガジャアに着下車して驛内散歩す午后高原に出づ列車は蜿蜒迂回途に墜道を穿ちて絶頂に上る奇觀あり超ゆれば白雪渺漫たる滿州の郊野を走り遂に午后九時滿州里驛に着す二時間停車此驛にて旅券の検査、荷物の税關検査がある威かめしき検査官各室内に來り靴を開けたが只申譯丈で濟んだ底から跳繰る様な事はせなんだか仙石氏はトランクの検査に態々引張り出され先生大に瀟々翼翼し居る際に都合悪く内地敷島煙草二十箱程引出され秤に掛けられ多少小言食つた様だつたが税金は免れた量多

き絹物多數の煙草、石鹼、香水等は巧にやらなければ税金を取られる、此驛にて滿州の終点爾后は眞の西比利亞地となり眞の露の本國となるのである

十四日、晴天で午前十時チタ^{Titia}に着した昨のマンヂユリーを離るゝより眞に西比利亞平原となり一の辨髮長袖の滿州人を見ず地理書の圖に見る毛深かき顔窪みたる眼毛皮を衣たる半獸半人的のシベリヤ土人許りを見る乍併此チタ驛の停車場及其附近の建物等全く歐洲的で露國經營の壯大なるは誰しも感ずる所である

十五日、拂曉列車ボーイに搖り起さる之れ又税關検査のタモゼンナ Tamozennar 驛に着したるを報したので時計を見れば午前六時半沿道既にバイカル湖の朝霧に霏めたるを透見した検査官例により荷物改め他室にては随分八ヶ間敷所もありしが予の室にては靴も開けずに事濟んだ午前中は晴天で有名の「バイカル湖」の渺漫たる水波を蹶て煙を吐く汽船、木葉の浮泛するか如き漁舟、レールの岸を洗ふ小波久敷荒原に倦したる眼には他になき眺めである之れに數多の小墜道を縫ふことなければ言ひ分なした、「イルクック」に近いから端書を認むるやら荷物の結束をするやら遂に午后二時 Irkutsk 着す此驛にて乗換

イルクシクはバイカル湖畔にある都會で完く歐州風住人

美服を着し停車場は新橋驛より遙に壯大なり

赤帽室内に來て（赤帽は白布の前垂を着し胸に數字の記せる徽章を帶ぶ）荷物を乗換列車内に運びたり所持せる切符を驛内に持行き室番號の記入を求むる等の世話に五十哥を拂つた新の列車室は前者より廣濶で且つ二名の占領となつたから何等の不都合も感じない夫れに食堂附ボーイは今度は少々獨語を解し下さる便利があつた

十六日、本日は別段著明の驛も通らず只廣原を轟々々走のみだ列車附ボーイに二人で四留呉れてやつた
十七日、カンヌク、アデンヌクは夢の中に過ぎ去つた朝白雪皚々九時三十分ポゴトル驛の室外寒暖計氷点下十八度を示してたる午后一時マリンヌク *Marinette* 着下車散步す午后は日本人集合して骨牌を戦はし無聊を慰した三四名の同伴者が有つた時は「トランプ」か八八の遊戲が宜しい念の入つた小説、堅苦しき書籍などは嘈々敷流車中では却て難義を感ずる、

十八日、未明に有名のおブ *Obe* 河を渡りて後は終日雪の海と思はる郊野を見るのみだから又昨日の戦闘繼續をやつた、午后五時オムスク *Omsk* 着す此驛はイルクック莫西哥間の殆んど半ばで浦壚から三千哩も距つてある大なる市街をなして電燈、瓦斯の設計も完成して居る、中等待合室及食堂等美を極めてたる市端にて有名の棧橋を

渡つた

十九日、朝七時（此邊はモスコフ時を用ゆ）平野の地平線から旭の半ば此世に顔を出す美景は格別である十時稍過ぎチェリヤビンヌク驛に着した此驛は *St. Petersburg* 露都に至る線の岐る、所で停車場内も美麗で繪端書、寶石類ウラル産石製置物など販賣してある安物にだまされて硝子製寶石を買つた人もあつた午后三時より「ウラル」山脈に登り掛つた郷里其他に差出す端書を認め十五分の驛にて差出した、此邊周圍山又山で樹と云ふ樹は皆檜に似たるト、松許り材木の生産は莫大のものであるう、
二十日、未明に「ウラル」を超へた、明日は愈々莫西哥に着の豫定、四邊の景は矢張り雪の海で村々に風車の多數を具ふるは一奇觀だ駄句出法綱

吹雪かれて吹雪かれて風車
冬の野に人の氣もなし風車

窓を打つ吹雪に覺むる今よいか
シベリヤに雪の句詠むか樞の人

午后四時ザマラ *Samara* 驛に着し驛内を漫步した此驛から露の青年一名予か室に混同した午後七時有名のヴォル *Volga* 河を渡つた

二十一日、本日モスコフに着せば日本人は四分するから心細い夫れに何處からワルサウ行の列車が出るか調べて

ない露人が車長に尋て呉れ「モスコ」の「ブレスト」
Brest 停車場から乗ることが判つた此露人少々の獨乙語
を解したから都合がよかつた

午後三時三十分ツラ Tula 驛着午後七時三十分豫定通
り莫西哥の大停車に到着した

Bis zu Moskow von Wladistock

10 Tage 9 st. 54 m.

結束して下車し構内に入れば「ホテル」の宿引露國人乍
ら邦語を能くし荷物受取の手續やら馬車の傭入やら何呉
れと周旋して呉れたは大に感謝の至りだ風間井上氏は爰
に分れを告げモスコ泊り、予等二名は氣か落付かぬか
ら直行するに決し幸ひ晚九時二十分發ワルサウ行がある
から時間と金の經濟上宿泊は已めとした馬車で一露里莫
西哥市街を横切る時の寒氣は又一入だ莫西哥は流石に舊
都壯大なる建物市街の美なる誰しも始めて歐州の都に一
驚する所だ所が市の通路は餘り感服しない伯林や民賢に
比し遙に劣れりだブレスト驛に着しては又一難義仙石氏
の荷物預けも切符買ふも露語ならざれば埒明かず多數の待
合者は珍奇人と思ふてか予等が周圍に群集し蒼蠅き程見
廻はし種々質問し後には氣味悪く思ふ程になつた乍併都
合よきはチヨイタ々獨語を解する人あり(予等の獨乙語
とは余程進歩せり)切符の購入、ワルサウ行列車等教へて

呉れた思へは日露戰役の敵愾心などは夢程もなく寧ろ親
切の待遇振りだ却て戰捷の爲めに尊敬するかも知れぬ
「ブレスト」驛は午後十時發車す中急行で室内は矢張り四
人詰余り清潔でない、乗合に二名の露國人あり一名は官
吏様制服を着今一名は人相の悪い商人らしき者であつた
頻りに片言交りの獨乙語で話し掛る氣味悪く思ひ乍ら予
等二名は疲勞の故を以て「ベット」に横はつて居ると露
人二名は狐鼠々々と頻りに雑談を已めず予はウト々々ま
ごろむ時に下の「ベット」から仙石氏が予に注意を與へ
て曰くだ(其時露人二名は便所かに出て行ひた)今夜は眠
りてはならぬ!! 如何となれば予は狸寢にて窃かに注意す
るに予等二名を指さし不穩の手まねにて談を已めず商人
らしきもの、懷中に「ピストル」らしき物あるを認むと實
際露國には虚無黨跋扈し其資金を得る爲め數々旅人を惱
ますと豫て耳にせる處なると且つ室は「イソツール」し
室内から掛る鍵も急には開かぬ戸の構造だから益々不安
を増し眠られず暫し様子を考ふると二名は室に戻りて官
吏らしきものは予の向側のベットに登り上衣を解き袴を
去り此度は意外棚より一本の古新聞紙に包みたる劔を取
り出して紙の上に奇麗に巻付たる麻紐を解放し始めた、
予は強迫さるゝ様の心持ちで突然棚から菓子を取り出し自
分も喰ひ其男にも勧めたら喜んで喰ふ尙注視すると其麻

紐にて「ベット」に付したる紐の切れ居るのに續き足しおる終はれば其儘横臥と來る汗馬鹿な心配だなど又予も横臥した然るに下の今一名は狸寢の様子がある矢張り安心して眠れぬ儘に便所に行けと高い「ベット」から飛降りて便所へ走り便器に腰掛ると睡魔頻りに襲ひ來るのと爰なら安心と氣の弛みで「うと々々」すると二度も戸を開けんとする人がある黙て用足して風を裝ふてると這般は鍵を以て引開けた見れば車掌だ變な顔付きして立て居る向ふも變てこな奴と思ふたに違ひない已むを得ず室に戻りて「ベット」に腰掛け居ると其内夜が明けた何の事もない午前十時に「スマリンスク」で商人らしきものは降車した、ソ一して今一名の者は「アレキサドルウオー」税關の税關吏で却て何吳と世話して呉れる誠に疑心暗鬼とは此事で旅中往々ある膝栗毛だから金を持って旅行する人は注意はせなければならぬが馬鹿な心配はせぬがよい、午后三時に或驛にて下車十五分間で驛の食堂に入り大急の食事を了し晚十時「ヴァアラノヴィヂ」驛で下車、食事、隣室に若い美なる細君を連れられた露人が居る先生蠶の癖に少々獨逸語を繰つるのを鼻に掛け頻りに遊びに來たる聲に大聲で下手な獨乙語を話掛るのだから一難義だ併し大將の獨語は中々正則だ、本日モスコ―着報郷里知已等へ差出だす

二十三日、ワルサウに近づいたので結束した午前九時 Warsaw に着下車馬車を備ふて約四十分ウエンスキー、ボクザール Varski Volkai 停車場まで走つた、ワルサウ市街は美麗壯大で建築物など見るべきものが多い爰の博物館が好いソ一だ午后四時半の發車だから中々時間がある一等待合室に荷物を置けば驛の監視人が監視するから此室に入るに限る驛の食堂で料理を喰ひ麥酒を飲み驛内の兩替室で殘金の露貨を換算し午后四時發伯林直行的急列車に乗つた此列車は獨逸國のもので車掌、ポ―イ等皆獨人だ午後十時 Alexandrovo (露獨の國境) 着官吏來り旅券検査をやらかす、十一時に獨乙の Thor 驛に着した冠様の帽子を戴く獨乙の巡查が旅券検査をやり税關吏が荷物の検査をする爰では特に煙草が八釜しい、二十四日 夜明け前伯林 Schlesischer Bahnhof に無事着六時五分 Friedrich Bahnhof 着之より下車し「ドロシユケ」でシヨインベルガー、ウィッファーの日本俱樂部を叩き起して休憩を頼んだ旅行注意の終論をすれば

- 一、同行者。單獨旅行では退屈する併し何の不便もない予等の如く冬季にて既に四名も有つたから春夏は大抵誰れか途連あるべし
- 二、旅費
- イ、百五拾壹圓四拾六錢 敦賀莫西哥間二等賃

ロ、九十五留(一留ハ我一圓五錢)急行割増

ハ、四十留

浦鹽莫西哥間食費

ハ、拾壹留七十哥

列車付ボーイ及赤帽

但し列車ホーイには「ウラジオ」「イルクック」間二人にて四留「イルクーク」「モスコ」間二人ニテ三

留與へり

ニ、五留

端書、菓物等雜費

ホ、七留

浦鹽宿泊料其他

ヘ、拾七留六十哥

莫西哥ワルサウ間二等賃

ト、拾七留三十哥

ワルサウ伯林間 全 上

先づ節約して右の如しだ今少し入用かも知れぬ

三、外國語

露語は綴字(アルハベット)丈でも知て居れば途中驛名等知るに便利だ小生は數字途中要必の單語

等少しく調べたから幾分便利であつた、獨逸語は下手

乍ら大に助つた佛語、英語を知れば尙宜しい

四、荷物

手荷物は前に記した「トランク」の如きは賃

錢が高いから船で送るがよい、一箇を二名分とすれば

半額で行く

五、時間表

列車内に露語にて書せる表が有れど誠に當

てにならぬ食堂に英語に翻譯した西比利亞歐洲線案内

の小冊子(慥か販賣すと思ふ梅田商會にも在らん)がよ

ろしい重もに莫西哥以西に必要があるが之れも驛夫に

聞けば親切に教へて呉れる獨乙語を知れる旅客があれ

ば就て問ふも親切に聞て呉る、

六、旅券裏書は横濱か、神戸の露國領事に依頼すべしだ

已むを得ざれば予の法を取る

○獨乙短信

(羽根田、河合の両君より)

(一)

謹啓益々御清榮奉賀候小生頑強御休神被下度候、當地ではドクトル問題が大に騒しく候何れ眞の光輝を發揚する時期も不遠と存し候、昨日アングラー先生より「テーマ」を貰ひ申候、素養なき小生の仕事としては大變な事に御座候。……一昨日左の個所 *Walterstr. 28, I. München* へ引越申候。此頃ポツ／＼支那人が當地へ參り候……由來の呑氣坊、獨乙へ來ても一向に内の事か思へず、友人等は夫れは結構な事だと賞て呉れ申候……在民賢の留學生所々へ轉學せし爲め誠に淋しく相成候併しれ蔭で下宿屋では大モテに有之候(羽根田信次君)

引越の夜の寝心やうする寒

(二)

思ひ出多き春雨傘の *Salome Dame* の「カルテ」拜受何れ

は數に洩れぬ遙けき配所の學友連 Album の中に一段の光彩を添へて見ゆる此美人、大に羨むべしと誰彼か評し居候。「ブラッツ」の青葉霜に落ちて都大路に吹くや木枯北時雨、「ヤバーナ」の顔か黄色に暗色を帯ひて、一方の空を眺めては「アー」の長大息、併し此殿になると小生の如き唯我唯一、到る處に氣焰を吐き散らし折柄の寒氣を熱ろし去つて、ね蔭で「ヨークス」か助ると冷かす者有之候程「ハイムツエー」を起し不申候。獨乙婦人か出胸出尻の腕まくり、初の間こそは面怪な獸の様に感じ申候へども化學的の同化作用とても申候か已に其筋の「プロフェスサー」の指導に據り來らん「カンネバー」の時ころと今より手具懸引て待居申候……河合縣君來民、小生と同宿、余の爲めには如何計「フロイデ」に候や毎日一所に「ネーメツ」に婆さんより語學を習て居候……

(羽根田君)

(三)

謹啓十一月二十四日無事民賢へ到着、羽根田氏を起し同家に起居罷在候同氏は勿論松野、三好氏等親實に世話し呉れ候、モツァルトの婆さんの所へは時々参り日本食を喰ひ申候。尙大學へは本日入學の手續相添候、専門學校の各位へ宜敷願上候 (河合鷹君)

(四)

……内地ではD.E.を馬鹿にし居候へども本元ではドウシテノの騒ぎ、天下コンナつまらぬ事は無之候。……定めて御地はた正月で面白い事つくめに有之候はむ、三更禱を蹴て思を故國に走す事幾度ろや……獨乙大學の旺盛、市街の壯麗、道路の完美、一として驚歎せざる者無之凡て實質的は獨乙固有の美風に御座候、何ても百万石だど炬力味をして居る金澤の「オアンサン」達にたつた一目此石と鐵との市街か見せたい者と感申候日本の現狀では「トテモ」富國強兵は六ヶ敷、余は之れに對し大經倫を持って居る何故か大臣にならんかと云つて來る者か無い呵々……本年は天氣もよし氣候も温し下宿では「モテル」之れて試験がモ一少し樂であつたら十年も居て見たい心持かする、今夜は「パークホテル」て例の通りの送年會、私は金澤出の新米ですと摺挨拶する筈に候 (羽根田君)

(五)

……元旦には伯林より箱詰の日本餅を取寄せ申候二十余名の何れした、かもの、天狗、大小を問はず頭のわけ振り、髭の剃り立てをすらりと並へて所もせまき「モツァール」町のね婆さんをして妙な者を喰ふなどキヨロリとした眼をまわいて感心せしめた處などは先づ民賢のた正月には唯一の呼物、直覺的とやらの畫家か好詩題と喜ふ圖なるへし、何といふても此正月はピシヨノノ濡れても善

いか金澤か戀しく候御地の岡本京太郎様御渡歐之由遙に
双手を擧げて歓迎仕へく候 (羽根田)

* * * * *
* * * * *

會 報

○叙任及辭令其他

▲宮内省▼

叙正七位	從七位勳六等功五級	羽根田信次
叙正七位	從七位勳六等	吉井康次郎
叙正七位	從七位勳六等	小島顯治
叙正七位	從七位勳六等	瓜生尹重
叙正七位	從七位勳六等	春田久太郎
叙從七位	正八位	佐々木純一郎
叙從七位	正八位	鈴木實
叙從七位	正八位	羽田公太郎
叙從七位	正八位	山下鋳吾

叙從七位	正八位	水上俊三
叙從七位	正八位	英軒二
叙從七位	正八位	松井源長

(以上、三月一日)

叙正五位	從五位勳五等醫學博士	木村孝藏
叙從七位	(四月二十日)	松原三郎
叙正八位	(全上)	六嘉孝光

▲陸軍省▼

工兵第九大隊附陸軍三等軍醫	西村順八
休職被仰付 (三月三日)	陸軍二等藥劑官 白井順太郎

濱寺臨時衛戍病院附被免

陸軍二等藥劑官 白井順太郎

補和歌山衛戍病院附 (以上、三月五日) 重砲兵第二聯隊附陸軍一等軍醫 太田長作

免本職補步兵第七聯隊附 步兵第一聯隊附陸軍一等軍醫 藤浪謙

免本職補重砲兵第二聯隊附 步兵第六十九聯隊附陸軍一等軍醫 早瀬三求

免本職補輜重兵第九大隊附 步兵第七聯隊附陸軍二等軍醫 小西俊三

免本職步兵第六十九聯隊附一等軍醫職務心得被仰付(以上、四月十三日)

陸軍一等軍醫 松浦 啓三

騎兵第十三聯隊附被免臨時韓國派遣步兵第一聯隊附被仰付

陸軍二等軍醫 小 町 環

補騎兵第十三聯隊附

▲海軍省▼

豐橋乘組海軍少軍醫 小出貞次郎

兼韓崎乘組被仰付 (三月十九日)

瀨速軍醫長兼高千穂軍醫長海軍大軍醫

大 西 瀨 治

免兼職 (四月一日)

豐橋乘組海軍少軍醫 小出貞次郎

兼韓崎乘組被免 (四月十七日)

▲石川縣▼

石川縣金澤病院醫員 三木 三郎

月俸五拾圓給與 (三月二十二日)

金澤醫學專門學校教授

鬼 頭 英

石川縣金澤病院婦人科部長ヲ囑託ス (三月二十二日)

依願職務ヲ免ス

石川縣金澤病院醫員

三 木 三 郎

石川縣金澤病院醫員ヲ命ス

藤 井 一 雄

月俸金貳拾圓給與 (以上、三月二十六日)

(各 通)

石川縣金澤病院醫員 丹 羽 直
石川縣金澤病院醫員 岩 佐 兵 藏

月俸金貳拾五圓給與 (三月三十一日)

石川縣金澤病院醫員 佐竹 清 吉

月俸金貳拾圓給與 (三月三十一日)

(各 通)

石川縣金澤病院部長 佐々木 達
石川縣金澤病院醫員 石坂直次郎

土京ヲ命ス (三月三十一日)

石川縣金澤病院醫員 横 山 鼎

依願職務ヲ免ス (四月八日)

石川縣金澤病院醫員ヲ命ス

古屋 榮 治

月俸金貳拾圓給與 (四月八日)

石川縣金澤病院長醫學博士 高安 右 人

依願囑託ヲ解ケ (四月十五日)

石川縣金澤病院部長ヲ囑託ス 醫學博士 高安 右 人

年手當金五百圓給與 (全 上)

石川縣金澤病院長兼部長ヲ囑託ス 山 碕 幹

年手當金八百圓給與 (全 上)

石川縣金澤病院醫員 岩 佐 兵 藏

依願職務ヲ免ス (四月二十四日)

石川縣金澤病院醫員囑託 馬庭 駿 一郎

囑託ヲ解ケ (四月三十日)

石川縣金澤病院醫員ヲ命ス 馬庭駿一郎

月俸貳拾圓給與 (四月三十日)

石川縣立金澤第二中學校醫 小原芳雄

願ニ依リ學校醫囑託ヲ解ク

石川縣金澤第二中學校醫ヲ囑託ス 芦澤孝治

年手當六拾圓給與 (四月三十日)

▲本校▼

金澤醫學專門學校教授醫學博士 金子治郎

京都帝國福岡醫科大學ニ於テ開催ノ解剖學會ニ列席ノ爲メ出張ヲ命ス (三月二十日)

金澤醫學專門學校講師 山田謙治

依願囑託ヲ解ク (三月二十四日)

依願雇ヲ解ク (三月三十日) 雇 大島順

依願囑託ヲ解ク (三月三十一日) 金澤醫學專門學校講師 小原芳雄

金澤醫學專門學校講師 小原芳雄

囑託中勉勵ニ付手當トシテ金七拾圓給與 (三月三十一日)

金澤醫學專門學校内科學副手囑託 樋口平次

同 名取博三

同 梶川靜夫

同 杉下孝造

金澤醫學專門學校内科學副手囑託 福田美明

同 金平鍊太郎

同 河口賀真

同 眼科學副手囑託 田中基保

同 外科學副手囑託 太田得郎

同 產科學婦人科學副手囑託 馬庭駿一郎

同 病理學副手囑託 小田善壽

同 眼科學副手囑託 月岡勝治

依願囑託ヲ解ク (三月三十一日) 金澤醫學專門學校内科學副手囑託 藤崎榮吉

同 眼科學副手囑託 服部暢介

同 產科學婦人科學副手囑託 池部正鑒

同 眼科學副手囑託 赤祖父廉三

同 眼科學副手囑託 大住惠

同 外科學副手囑託 廣瀨淵龍

同 囑託ヲ解ク (三月三十一日) 西坂武茂

金澤醫學專門學校教授 松原三郎

東京帝國大學醫科大學ニ於テ開催ノ精神病及神經學會ニ列席ノ爲メ出張ヲ命ス (四月一日)

金澤醫學專門學校書記 川島俊

教務事務打合セノ爲メ岡山醫學專門學校長崎醫學專門學校及京都帝國福岡

醫科大學へ出張ヲ命ス (四月一日)

金澤醫學專門學校教授 高安右人

東京帝國大學醫科大學ニ於テ開催ノ眼科學會ニ列席ノ爲メ出張ヲ命ス (四月一日)

雇申付 吉野巖

月俸金十四圓給與 (四月二日)

金澤醫學專門學校教授 櫻井小平太

御用有之上京ヲ命ス (四月十四日)

金澤醫學專門學校書記 山本兵三郎

校長上京ニ付隨行ヲ命ス (四月十四日)

教授 阿部莊二

生徒ニ係ル郵便及電信爲替受取方管理者ヲ命ス (三月二十七日)

金澤醫學專門學校書記 川島俊

本校出納官吏ノ帳簿及金櫃検査員ヲ命ス (三月三十日)

雇 吉野巖

教務課員ヲ命ス (四月二日)

教授 宮田篤郎

明治四十二年度生徒身体検査醫員長ヲ命ス

副手囑託 芦澤孝治

同 鷹見義郎

同 吉尾開道

同 高木琢磨

明治四十二年度生徒身体検査醫員ヲ命ス

副手囑託 丹羽直
同 館保二

助教授 松田菊治

教務囑託 佐復源太郎

明治四十二年度生徒身体検査委員ヲ命ス (以上、四月十二日)

教務課主任書記 川島俊

庶務課主任書記山本兵三郎上京中庶務課主任代理ヲ命ス (四月十七日)

○鬼頭教授を迎ふ

時を奪はれたる鳥の怙み少なく親を失へる兒の憑る邊寡
き皆これ一種の落寞を感ずるなるべし。曩に我校産科婦
人科講座に於て小川教授の長逝以來定まれる師を頂くな
く彼の鳥彼の兒の如く何れに適歸するやを知らず此の時
に當りて我等は切に良師の訓育を受けんことを欲するこ
と久し。然るに天道は非ならず、陽春三月下旬和煦たる
春風は我が學窓を叩きて茲に一つの福音を齎せり曰く鬼
頭教授は今般仙臺醫學專門學校より轉任せられ本校に職
を取らるゝと。茲に於て我等欣喜措く處を知らず漸くに
して彼の離鳥の憂あるなく孤兒の悲あるなくして皆各ろ
の堵に安じて學業に勵むの道を得たり、實に先生ハ我等

を寂寞の裡より救はれたり。先生は赤門の出にして學殖は深く前校に於て既に聲名ありと聞く。其の溫容は以て人を和らげ其の諄々篤厚なる講義振は聽者をして自から傾注せしむるに至る。深遠なる學理は正に斯くの如くして以て其の蘊奥を極めうべし、生等先生の指導を喜び益努力すべし幸に先生我等の爲めに且つ又我校の爲めに盡力あらせられんことを希ふ爰に蕪筆を以て歡迎し辭とす

○小原講師を送る

一 盈一盛さても月花の秀麗長へに照つて咲かざる。
 一去一來何んぞ雁燕の趣嬌常に鳴いて飛ばざる。げにや行路朝に越賓を迎へ、夕に吳客を送るも、猶一夜の縁は以て惜別の袖を惹かしむと歎。あゝ。かくて吾人の感情は常に慾望以外に走れるなり。
 懷へば去歳の秋、松籟一世に悲風を傳ふ時、一朝小原講師は病床にいそしみ給ひぬ。以來星移り物變りて爰に數月を経ども面會は猶謝絶せられて、只闊閭紛々たる啤語に吾人は常に吸強せられ、憂泣せられたり。あはれ學海の一天。風雨滔々として明星遠く暗雲に消んとする乎。忽焉講師が辭任は公にせられたり。吾人の驚嘆何ものか之れに若かんや。

講師が學才は已に病理學に於て、果た藥石經脈の事に於て、又近くは本誌編纂に就て、實に雄渾、篤實、精巧、一代の沈滯を闡發して、よく油滑佻諛の徒を畏懼せしめたり。しかも一度は講師の教掖を受けたるもの、常に肝胆相照らし師弟の關係切々にして磋々たり。冷々にして拘々たらず眞にウイルヒョーのコンハイムに於けるが如し。

然るに講師は今や已に吾等の講師ならず、徒らに病軀を横へて何をか獨り嘯き給へる。水鷄門を叩いて孤兒親を慰ぶや切なり。講師幸に自重自愛せられ早く健康を恢復し給ひ、再び長生の英氣を以て斯界に蹶起せられんことを祈る (二芳誌す)

○本校記念式 五月十一日午前七時半濟々堂に於て舉行せられ、職員生徒一同着席、恭しく勅語を奉體し終て本校の萬歳を唱し、後、阿部教授が追想に就ての一場の講話ありたり

○三宅博士の講話 醫學博士三宅秀氏は六月六日舉行大日本私立衛生會石川支部總會に出演のため來澤せられ翌七日午後四時本校濟々堂に於て醫師人格其他吾人が修學に關して約一時間に亘る講話ありたり。

○十全會講話例會

第四十六回講話會例會は二月二十日本校舊内科教室に於て開催せられたり、當日出演の諸氏及演題左の如し、

▲我儘と奮闘主義 通常會員 石田九成君

▲乳糜尿 特別會員 池田菱吉君

▲苦言 通常會員 淺野達也君

▲偶感 通常會員 長井敬孝君

▲未定 田中講師

▲レノト氏病患者の供覽 芦澤孝治君

▲醫師としての秘密 村上教授

●お断り、筆者當時寒胃に犯され臥褥せし爲め諸氏の有益なる講話を記録する能はざりしは大に遺憾ありき茲に特記して諸氏の寛容を媵つ。(ツタ生)

○十全會講話例會記事

津 田 生

第四十七回講話例會は三月廿一日本校舊内科教室に於て開催せられたり、來會者は職員、醫員及び學生等づらりと見渡す所無慮三百名、室内はとく溢れん許りの盛況

を呈し、宛ら壽志づめにせられたる如く、立錫の餘地になしとは、げに憊る狀況を言へるものなるべし、金子部長が想像以外の想像の實現に遭遇したりとて滿面に笑波を湛へて打喜ばれたるも、さもしき事なりかし、今左に講話の概要を記載せむ。

▲開會の辭 金子部長

▲心臟破裂及デモンストラチオン

村上教授

教授は本日偶々稀有なる屍解剖(心臟破裂)ある好機を利用して講話會に於て廣く會員に説示せんが爲め、先づ順序として一般卒死(頓死)の原因、誘因、病理、年齢との關係、及心臟破裂の好發部位、病理解剖的所見等に就き其梗概を述べ、次で實地屍解につき心臟の破裂の狀態及び其部位(左室)を開示し、其他本患者は脾出血を兼有せし爲め該標本を供覽せられたり、本日は病解剖ありし爲めに、かばりかの盛大を極めしは、深く講話部の鳴謝せざる可からざる所なるべし。

▲華を去り實に就く 通常會員 松井啓君

君は戊申詔書に見わたる『華を去り實に就く』てふ意義について、つくづく考慮せられたる事どもを陳べらる、華即ち所謂奢侈は、政治、宗教、倫理、經濟的の諸方面より觀察するも奨用すべきものに非らずとし、曾てラッ

レイ氏が奢侈は、高價にして贅澤なるものなりと説明せるを大に推讃し、奢侈は相對的のものにして時代より依りて變遷して其程度を異にする事、野蠻人は文明人より一般に驕奢なる事をのべ、加ふるに奢侈は國家又は人物の隆替興廢に顯著なる影響を波及するを歴史的事實を臚列して論道し、最後に虚榮浮華の弊習を抛つて素朴質實の美風を涵養し實行せんとするには個人的よりは寧ろ廣く社會的に爲さざる可からざる旨演ぜらる、此時余は、そいろに長井君が得意のハイカラ亡國論の弄々と狭き胸に迫るを禁ずる能はざりき、惟ふに虚榮の幻華に惚がれて星よ董と騒げる輩やからの不仕鱈は癩にさはれど、けちくのみして、しみつたれて、こせつく様にてとも一時は得する如く思はるれど終には物になれず、余輩は世の道學先生の如く煩瑣なる論理を陳ぶる資格はなれども、『人はらしくあれ、決してぶる可からず』と主張せんと欲するもの也、官吏は官吏らしく、教育家は教育家らしく、商人は商人らしく、學生は學生らしくなすは、げに妥當の所爲とこそ謂ふべけれ、吾人は須らく現在に擴充したる満足を力とし、懋績を念として大に向上し精進するを要す、人の榮華を見て徒らに心のはら／＼する様にては所詮駄目也、世界の富豪ロックスヘラーの娘は『思ふものがすぐ得られるから世の中が楽しく無い』と下らぬ愚痴をこ

ぼし、ラセラスは太子に生ながら『不足がないのが不足だ』と嘆息せるに反し、顔回は獨り陋巷にあつて其樂を改めず、ダイオゼンヌは天下の富を保ちし帝王よりも樂しく一生を狭き樽内に送りしにあらずや、吾人は虚榮にあこがれて何等の定見もなく、只小さきパニチーを満足せしむる、飘逸子の氣がしれざる也。ゲーテ曰へらく

“Das Behagen ist ein Spiegel, in welchem jeder sein Bild zeigt.”

と再讀に價すべき昌言なるかな。

▲前 繼

通常會員 淺野達也 君

前回に獨乙語の必要を論じたる君は更に其の要求として(一)修學旅行を舉行せられたき事、(二)標本庫を開放せられたき事、(三)部長又は醫員が生徒を率ゐて病室に往診せられたき事の三點を列舉し遺憾なく其胸裏の所懐を述べらる、古人も思ふ事云はぬは片腹痛きわざとか申されたる如く吾人は常道を脱せざる範圍に於て腹藏なく其憶懷を撥き出して忌憚なく、ごし／＼と之を主張せんとを推奨するもの也、さる勇氣も無くてぶつ／＼と片隅にて下らぬ不平を鳴らす蔭辨慶は所詮骨折損のくたぶれ儲けをなすのみ也、さはれ毛を吹いて疵を求め、麤をついて蛇を出す様にて愚の沙汰なり、是等は常識の問題に屬す、兎に角君が要求の第二第三項は眞に余輩の左袒

する所にして單に之を主張するも其間幾多の事情の爲めに今日之を實施する克はざる所あるにもせよ、先づ恁るしほらしき問題は君一個の意見に非らで學生一般の渴望たるに疑なき以上は早晚之が革新の運びに到らん事を翹望せずんばならず、君が要求の矢の根は髓に急所を刺したり、其主張の條項は痒い處へ手がどゞく様にて、いともすがゞしき心地したり。

▲前 繼 通常會員 佐藤祐造君

前回に引續き羅句語に就き陳べらる、されど人の理解し得ざる事をしごけなく物語りて獨り悦に入る(?)も餘り虫のよき話ならずやと聊か病的懷疑の陥穽に落ちざるを得ざる次第也、ほんの申譯に下らぬ事ども饒舌りたて、得々たるへろゞ武士に比すれば健氣なる君の意氣込に感服すれど直截に謂へば得意の Unbegonnenen Collision の外今少し手ごたへある説明こそ望ましけれ。

▲奮て演壇に立つべし 通常會員 小野澤庄桂君

君は講話會の益々さびれ行くを憤慨して謂へらく毎回出演者の顔振れの殆ど固定して其少數なるは、諸君が何くれと無く毛嫌ひして衷心より演説の緊要なるを自覺せざる爲なるべし、疾病を治癒するのみが決して吾人が唯一の義務に非らず、之を未發に豫防するも余輩の義務なれば諸君は將來境遇に逼られて衛生演説を爲さざる可から

ざる時機に遭遇すべし、元來吾人は手の働さが必須なるが如く口の働も亦大に肝要なりとて曾て立川雲平氏が凡そ演壇に立つ事百回にして扱めて其胸臆の三分の一を據ぶるを得べしと陳べられたる事實を捕捉し來つて清新の興奮劑を萬遍なく振りまいて、いと痛切よ辯舌鍛鍊の必要を鼓吹せられたり、今更余が辯舌必要を囁々するまでもなく竹越三又や加藤咄堂の著書を繙けば直に明瞭なるべし、思ふに一度口を開けば立どころに滔々數萬言迸り出てゝ虎吼の龍嘯く島田沼南及花井卓藏氏の雄辯もよけれど、識見該博にして腦頭豊富なる三宅雪嶺氏の如き訥辨もなかゞに得も云はれぬ一入の興味あり、されど兎に角人には一かどの辯が肝要なり、逆流に溯る鮎は其味が甘く、嚴寒に耐る梅は其香のかんばしきが如く物に上達せんに幾多の辛楚經驗をなむるが大切なり、就中辯舌の如きは其最たるものなるべし、些細なる事にて屁古垂れる様にては、てんで物になれる見込なし、さるにても君の辯述振りの何となく氣が利きて取廻しが巧く聽者の心を読むが如く媿々として、辯する處、確に陸離たる異彩を放ちたりと謂ふも決して過言にあらざるべし、予の歸納的推理より斷案を下せば君は斯界に於ける將來好望の俊髦なるべき乎。

▲調劑に就ての注意 通常會員 林 助教 授

豫て本日演すべき腹案ありしも俄に已むを得ざる用件の差起りしと且醫學生が聽者の大多數を占むる本會に於て余の専門たる藥學の話を爲すも興味鮮しと考覈するが故にふと胸に浮び出でたる事を陳べて本日之責を塞ぐべしとて調劑に關する二三の注意を簡單に演述せられたり、憾らくは時間の都合上有益なる講話を聽くを得ざりし事を。

▲神經細胞の官能に就て 金子 教授

一千九百二年クロンタール氏が主張したる神經細胞の官能に關する新學說を紹介せられたり、氏が説明の主要は、神經細胞は元來定型性細胞に非らずして單に淋巴(白血)球の集簇したるものなれば、決して神經の官能を有せず、神經作用の本態は之より周擁せらるる、神經纖維も存在せるものなりと謂ふに在り、吾人の腦皮質中には核の二三個以上集合せる處あり、是れ決して遊離核に非らずして稀薄不著明なるプロトプラスマより包裡せられたる核にして氏は此を以て淋巴球の分化したるものと爲し、其淋巴管中にある時と腦髓中に存する時とは其周圍のメデウムを異にするが故に隨て其造構及び官能に相違を生ずるものにして其の集團せる個體が癒著する時は核は自ら溶解してクロマチン(Kernsubstanz)となり、是より神經纖維は形成せられて漸次増殖するに至る、而して無數の神

經纖維が各々周圍の一點より他の周圍の一點に至る中間に於て淋巴球(神經細胞)は之を被包する爲に一方より來る刺戟を能く諸方に傳達し得るものなり、淋巴球の生存期は永く持續するものに非らずして其死滅すると同時に分体作用に依りて更に之を新生し、其新陳代謝する毎に神經纖維を組纏する所の關係を異にするが故に從て神經の刺戟傳達上に多少の差異を生ずるものにして是れ實に微妙なる精神作用の發揮せらるる、所以なり且つ神經の官能は吾人が意識の消失する爲め其衝動の癱絶するものに非らずして神經の周圍端が刺戟に反應し得ざる機轉の存在する爲なれば周圍端は神經官能の發起する刺戟の原發點にして精神とは周圍端より傳導せられたる刺戟の總括に外ならずと、而して氏は自己の説を確めんが爲にヘルマン、及びアーチャー氏が腦皮質の作用に就て研鑽したる業績、Hungerfordの時期に於て筋肉は其重量の35%—50%を減少するも腦脊髓は厘に其2%を消耗するに過ぎざる事實、動物(又は人)に試験的に或時期の間蛋白質又は含水炭素のみを與ふるも精神機能には差異なきも他の組織細胞に在ては其構成々分の差異を生じ延て其作用に多少の變化を惹起するに至る事實并に神經細胞は只初期(即ち突起の發生せる時期に)Karyokineseに由りて分體するも完成したる神經細胞に於て決して之なき事實

等を列擧して神經細胞の毫も神經官能なき事を論張したり、此説に憑ればワルダイエル氏の主唱したる Zentgraf Theorie は殆ど其根據を失ふが如きもアファテー及びベーター氏等は之が反駁を爲したりと。(完)

○十全會講話大會記事

第九回講話大會は四月十七日午前八時より本校濟々堂に於て開催せられたり、本校、病院及び市内郡部の特別會員諸氏、通常會員諸君の來り會する者無慮數百名、出演者また多數にして滿堂立錫の餘地無く頗る盛會なりき、今左に講話の概要を記さむ。

▲開會の辭

金子 教授

湧くが如き大喝采の下に悠々壇に登りて、先づ開會の辭を述べ、且つ毎年五月は開催すべき大會を本年度は四月に繰上げたる事情を語られたり。

▲糖尿病に就て

特別會員

名取博三君

山碕内科に於て肺結核を合併せる糖尿病患者につき實驗せられたる食餌療法の結果に就き演ぜらる、先づ本療法は蛋白質、脂肪、含水炭素に従つて注意を異にする理由を陳べ之に關聯するローレンツ、ナウニン、フイーベル、

カンタニー氏等の説を擧げ、次で本病の食餌療法に關する諸家の説、殊に含水炭素療法として稱用せらる、ナウニン氏の牛乳療法、モッセー氏の馬鈴薯療法、ノルデン氏の燕麥療法、ルーリックカーハル氏の米飯療法、松田氏の豆腐療法、其他節約劑としてのアルコール使用説等を列擧し、最後に氏が本患者について實驗せられたる食餌療法の効果につき詳細に述べらる、其大要は主として蛋白質含有の動物食を興ふる時は尿中の糖分減少するも亦體重の減少を來し、馬鈴薯を興ふる時は諸症狀輕快して體重の増加を見るも、薩摩芋は大に不良の結果を來せりと、尙磨割麥は目今試験中にして其結果未だ不明なれば、後日更に他の試験をも爲して其結果を報告すべき旨のべられたり、尙氏は金澤病院に於ける明治二十六年より全四十一年迄十六年間の各年度の本病患者數及男女の比例(男三に對し女一の割)に就き報告せられたり。

▲フォルシユバハ氏試験法に就て

特別會員

池田菱吉君

先づ簡單に糖尿病の原因を臚列し、次でフォルシユバハ氏の行ふたる本病の發生上に關する動物試験を述べらる。

▲専門學校の獨乙語教授に就ての私見

特別會員

佐々城助教

氏は外國語研究に就ての意見てふ表題の下に演ぜらるべき筈なりしに都合によりて之を撤回し更に本表題をか、
 げ其獨乙語研究に關する私見として(一)簡より漸次難に進む事、(二)高尚なる意味を有する書を讀むよりは寧ろ單語、俗語を多く知る事、(三)確實に咀嚼して之を活用せしむる事、(四)眼又は耳の練習の外口より巧に之を發言し得る事、(五)教員は合議して學生の學力に相當したる書を選定する事、(六)學生は當に自己の上達せざらん事を憶ふて其發展の必要を衷心より自覺する事、(七)授業に際して學生の餘り多數ならざる事等を舒べらる。

▲演題未定に就て 通常會員 井村勇作君

演題未定を分類して(一)材料の缺乏、(二)材料の撰擇未定、(三)虛榮心に由るものとの三種と爲し、いと痛快に之を攻撃して其頭上に一大鐵槌を加へたる君の熱誠こめたる語のいかに即効の顯著なりし事よ。

▲骨組織の二三のデモンストラチオン

柴野助手

骨組織の染色法に就ては從來へマトキシシ、エオデン重染色法、カルミン染色法、レツクリングハウゼン氏法等あれども、兩三年前シーモル氏が獨乙中央醫學會に於て報告したる染色法は頗る鮮明にして殊に骨小窩、骨突起及石灰質の染色等には獎用すべきものなりとて各染色法

に就ての比較標本九個を供覽せられたり。

▲記憶に關する病的現象

通常會員 高橋邦太郎君

記憶に就いて自己の見解を述べ、且つ米國の二宣教師が病的記憶障礙を發せし狀況を語られたり。

▲續發變性に就て

特別會員 佐口榮君

續發變性の意義を簡潔にのべられ、神經の纖維系統を檢索するは病理解剖又は動物試験等による事、及該檢査方法并に其顯微鏡所見についてワイゲルト氏、マルシー氏の法を語られ、最後に氏が犬の胸髓上部の左(半)側を切斷して二週間生活せしめて其知覺運動障害を檢査したる後之を撲殺して實驗せられたるものに就き、第二、第四、頸節中央部、第二胸節の最上部等の各切斷面の變化につき細密に説明せられ尙鏡的標本として第五、第八胸節中部の斷面及び比較として脊髓癆の胸節上部の斷面等を供覽せられたり。

▲我を大にせよ

通常會員 長井敬孝君

ルーズヴェルト氏が現世界は勇者の世界なりと絶叫せし事項を提供して、吾人が社會に處せんには寛濶なる精神と活達の意氣とを以て渾身のエチルギーを擧て自己の發揮につとめざる可からず、もし毛嫌ひする者あらば之を自己の心裡に同化して清濁合せ飲むの度量を養て自家の

輪廓を大にするを要すとの議論、さすがに君が十八番と見しは僻目か。

▲神經節細胞と白血球及全細胞内の細

液管に就て 金子 教授

神經節細胞内に白血球の存在せる事は既に諸家の認識する所なれども其作用に就ては今日未だ諸家の説一定せず或者は病的炎症機轉の爲めに白血球の進入するものとなし、或は老廢せる神經細胞を嚙喰するものなりと言ふも、通常の官能を營める神經細胞に在つても白血球を含有するを以て前説の非なるを知るべく、又若し嚙喰作用を爲すものごせば多量のプロトプラズマを含蓄せざる可からざるに本白血球は稀薄不著明なるプロトプラズマを有するに過ぎざれば後説も穩當ならず、余の考にては神經細胞は自己の營養供給の爲に白血球を攝取するものにして白血球は此以外に何等の作用なかるべしと述べられ、且つゴルヂー氏か創見しホルンブレン氏が營養供給を司る細液管なりとし、レミノック氏が白血球の神經節細胞中を通過したる痕跡なりとせし神經節細胞内に存在する管腔は恐くは白血球の溶解したる結果胞體中に數多の空胞を形成したるものなるべしとして自家の意見を陳べられたり、教授は胎兒、小兒、中年者、老人及犬、兔の幼小なる者と成育したる者の神經細胞に就き調査せられたれど

も今後更に研究の結果報告すべき旨演ぜられ標本として三十二歳の人の脊髓神經節、家兔の小腦プルキンヂー細胞、犬の交感神經節細胞等を供覽せられたり。

▲電氣の治療上應用 通當會員 鈴木正孝君

電氣は其分解作用の他、光、温、レントゲン氏X光線等として疾病の診斷及び治療上に廣く使用せらるゝ事をのべ、理學的療法の一として一般の神經麻痺及興奮、刺戟誘導法、血管運動神經麻痺、并に黴菌の作用を減弱し、又は其產出毒素を破壊する等の場合に用ゐられて其用途の廣大なる事を語る。

▲自家考案の腦切斷器と腦髓内の神經

徑路を研究する一新法 松原 教授

腦の連續切片を造るにマルキー氏法、ニツスル氏法以外簡易なる自家考案になれる腦切斷器を紹介せられ、次で氏の師マイエル氏が發明に係る腦髓内の神經徑路を研究する一新法を報告して該標品を供覽せられたり。

▲トラホーム病源の報告第一

特別會員 河野 勇君

トラホームの病源は今日尙不明に屬するを以て之が研究に従事せる學者少からず、氏は先づ本病源に就て文献上、マイエルホッフ、ペーテル、ツールテルテン、パンノー、コツボウ、イクス、セッフエル、ポルト、及宮島博士等

の所見を列舉し次で氏が今回本病患者の顆粒中より檢出せられたる一病原菌に就き報告せられたり。即水胞性結膜炎及びトラホームを兼ねたる一學生のトラホーム顆粒を崩壊して之を培養せしに一種の菌を發見したり、然るに其後又本病に懼れる二十一歳の男子の顆粒をクナッパ氏鉗子にて搾出して前同様の菌を得たりと、而して該菌は四本のガイセルを有して自由に廻轉運動を爲し、アニリン色素に容易に染色するも中央部に少しく不染色部分あり、グラチン穿刺培養基を液化し、グラム氏法に依て脱色せず、馬鈴薯培養は未だ試験せずと、氏は更に動物試験を行ふて其詳細なる報告を本誌上に登載せらるゝ筈なり。

▲上顎竇蓄膿症の根治手術に就て

附、上顎竇内に逆生せる齒牙の例 (二個の標本供覽)

特別會員 濱地藤太郎君

氏は滿二ヶ年間に診療せられたる本病患者は實に二百九十八名にして耳鼻科患者全數六百八十一名に比すれば其43.7%を占め其非常に多數なる事、本病患者の半數以上は頭痛、睡眠障礙、精神憂鬱、記憶力減退等(所謂鼻性精神機能不調)の爲に内科醫の診療を請ひて其結果同醫の指揮の下に外科醫の所に來るものなれば以上の神經症狀あれば一應鼻腔検査の必要ありと述べられ、之が手術

法たるキユスター、ヤンゼン、テゾーベ、ペンニングハウス、フリードリッヒ、クレッチマン、和辻博士等の諸法を列舉し、本病手術に局處麻酔を用うる時は七ヶ條の利益ある事を陳べ、次で氏が經驗上最も良好なりと思惟して百三十七名の患者に施されたる術式に就て詳細に述べられ、最後に一患者(三十五歳の女)手術の際取出したる顎竇内に逆生せし二個の小白齒を供覽せられたり、氏之が詳細なる事項を後日の誌上に報告せらるべし。

附言、(一)宮田教授は濱地氏が犬齒窩の鑿開は七M—一O.Mにてよき旨説明せられたるに對し、指頭を挿入し得る程切開するがよしと陳べられたり、

(二)高木醫員は昨年六月金澤病院に於て一患者の上顎竇に逆生せし犬齒を供覽せられたり、

▲肺結核と神經痛との關係 山 崎 教授

教授はツベルクリン接種試験の陰性なる五十二歳の重症肺結核患者の顯著なる交代性神經痛を兼ねたる一例につき其疼痛經過を詳細に陳べられ該神經痛は患者の惡液質に陥るが爲め血液は常性を失ひ神經の營養障礙を起すが爲なりと、而して肺結核と神經痛(又は神經炎)との關係に就て記載したるアルバイトは獨國學者には鮮きも佛、英學者には多しと、本患者の神經痛(痙攣性刺痛)は腹部に原發し、次で漸次胃、喉頭、項部、後頭部、下腿後面、足關節、足部、腰部、薦骨部、を犯し最後に肛門周圍神

經痛を來して間もなく死の轉機をとりたりと。

▲淋巴肉腫に就て 宮田 教 授

教授は左項部より側頸部、鎖骨上窩、頸窩、氣管の前面を経て右胸鎖乳嚢筋の前縁迄蔓延せる淋巴肉腫患者を供覽せられ、次で淋巴肉腫と淋巴腺肉腫とを混同すべからざる事を陳べて後淋巴肉腫の好發部位、年齢との關係、構造、性状、經過、ホドキン氏病との鑑別、療法等につき細り密に説明せられ淋巴肉腫の鏡的標本を供覽せられた。

▲演題未定 高安 教授

本日午後五時の列車にて醫門學校長會義の爲上京の途につくべき爲講話するの餘裕なしとて先に文相より發せられたる訓令に就て二三の注意を與へらる。

▲肺結核の早期診斷に就て

特別會員 米村吉太郎君

肺結核の早期診斷法につき諸家の報告せられたる處を自己の實驗に照して其優劣長短を評議せられたり、即ウィルヒョー氏の咯痰検査法、ツベルクリンの内服、注射、点眼等につき氏の經營せらるゝ病院に於て、數多の患者、看護婦、事務員、醫員等に試験せられたる成績を述べて必らずしも陽性成績を擧ぐる能はざるものなるが故に、結核患者の嚴密なる既往症、自(他)覺的症候を檢索するの

必要ありとし、理學的審査上諸家の唱道したる血壓の減退、脈膊の不正、心臟の萎縮又は肥大、肝肥大、顛顫動

脈の努張、第一第七頸推、第二胸推棘狀突起部の一種の壓痛、第二胸推棘狀突起部打診音變化、ラッセル、(大谷博士)、第一、第二胸推部の屈伸時の疼痛、(ナイセル氏)及乳房の變化等につき果して注意を拂ふべき價值ありや否やに就き自己の意見をのべられたり。

▲余の發明せる種痘針と套管針

通常會員 北村仲兒君

氏が今回發明せられたる種痘針及套管針につき其構造を説明したる後之を供覽せられたり。

▲小兒に於ける毛細氣管支炎及肺炎の熱浴療法

特別會員 岡本京太郎君

本療法は先にベルツ博士が稱用せられ其後平井博士(?)も大に推奨せられたる處にして予は十八名の患者に就き此法を試みしに其全部治癒し殊に其中絶望せし二名の患者さへ全治したるを見れば該法は大に奨用すべき價值ありとて、其熱浴方法につき細密に説明を與へられたり、此方法を行ふ時は患者大に安靜と爲り、チアノーゼ去り、呼吸困難の狀減退し、脈膊は充實して咳嗽止み、入浴中十分以上經過するか又發汗するに至る時聽診せば Pfeifen, Giemen, Krustern 等減少し呼吸音強盛となり、諸症狀非

常に緩解すると且其方法の簡易なるが爲め吾人が想像以上に容易に實行する事を得べく藥物療法より迥に有効なれば吾人が診断の結果毛細管支炎又は肺炎と見れば直に之を實行して可なるべしとて本療法が特に顯著なる功を奏する原理に就き説明せられたり。

▲梅毒の腦脊髄液及血清診断に就て

松原 敏 授

梅毒の腦脊髄液に於ける血清診断に就きワッセルマン、クラウト、ミユルレル、ボルゲス、クラスナル、諸氏の法を演述し、最後に在紐野野口氏が新に發見せられたる梅毒の腦脊髄液診断法を紹介せられたり、其法は腦脊髄液〇、一c.c.を取り10%の牛酪酸〇、五c.c.を入れて煮沸し、之に4%の苛性ナトロンを加ふる時は健康體なれば少しく混濁するのみなれども梅毒患者のものに在ては混濁高度にして雲翳状を呈すと、而して氏は五十名の梅毒患者に之を應用せしに四十八名陽性成績を得(96%)梅毒を有せざる二十三名の精神病患者に就ては全部陰性成績を得たりと云ふ。

▲疑問

通常會員 藤澤好彦君

づんぐりしたる躰をかひくしく演壇に運び込んで、あどけなき素振りもて、いと調子高らかに辯ぜらるゝ處嫌味がなく予はすぐろに一種のインテレストを惹起した

り。

▲閉會の辭

金子部長

右にて本日の講話全く畢る時に午後六時、因に本日急に用向差起り出演せらるゝ能はざりし諸氏は右の如し。

▲アルコール飲料に就て

特別會員 王森法靈君

▲ポロフェルチン療法

特別會員 竹多乙三郎君

▲痙攣性脊髄麻痺

特別會員 島 誠 郁君

▲演題未定

佐々木 敏 授

かくて名殘惜しき第九回講話大會は永劫に無窮にその麗しき姿を隠しぬ、されど、汝、來ん年には一しほ花々しきすがたして現はれ來れよ、是れ予が汝に望む唯一の注文たるなり、汝能く余が意を體せしや否や、さらばく

●お断り、筆者の粗漏、杜撰は偏に出演者諸氏の寛恕を請ふ

雜誌部委員 つだ 生

○十全會講話例會記事

つだ 生

本學年の最終の講話會例會(第四十八回)は五月廿九日午

後一時より本校濟々堂に於て開催せられたり、參聽者は教員醫員學生等大率貳百名、今左にそが講話の梗概を誌さん

▲開會の辭

金子部長

▲前承

通常會員 佐藤祐造君

さも雄々しげなる君が姿を演壇に見ること數回、しかも羅句語の素養なき余等に取りては、いと熱烈なる君が講演も猫に小判の譬にもれで、何が何やら薩張わからず、清新の空氣を萬遍なく振りまかんする君が講演は、いつも際立つて目にちらつけど、何となくウッスリと靄立つ夕闇の中にさすらひて遺瀨なき謂い知れぬ寂しさの舞々と胸に迫り來るはいかにや。

▲偶感

通常會員 藤澤好彦君

其の場の体裁をつくらはで何處までも粗朴らしい態度とあどけなき話振りで思ふた儘をキッパリ言ひ放つ處は、どもすればスイ〜したる頭に薄雲のかゝつたやうな感を惹起さする嫌なきにしもあらねど、ツマリこゝに君が演説の命緒をあり〜と認むる事を得るなり。

▲宗教觀

通常會員 松井啓君

悠揚としてコセ附かず、表情をこめて相手の心を讀むやうに眼を光らした態度に僕は先づ引付けられた、君は宗教を客觀的方面より觀察して自然の原理、宗教の極致、

小自觀と大自觀との關聯、儒教、佛教、耶蘇教の教義等につき媿々と辯じたる後斷言すらく、宗教てふものは或程度迄は迷惑を解かすも余は強も宗教を必要のものと認めず、つまる所今日の宗教は吾人の迷雲をはらすに容易ならしむるものなりと、さまで深く宗教を味ふたとなき余が這麼な重大な問題に左や右うと黄色い喙を容る、資格だになければ先づザット君の説を紹介する。

▲偶見數則

通常會員 淺野達也君

先づ醫師に人格の必須なるを説き、次で大町桂月氏のものせられたる續學生訓の中より面黒き不平と怨恨、未來の樂、理想の人物、當代の不平、人生の岐路等の數片につき聲高らかに、しかも妙に抑揚をつけて讀み上げられた、いかにもしほらしい箴言のやう聞えた、所で余も少し感じた驅豎醫則中の一句を序に書添へて置く、

心柔而無剛、怯而無勇、不得爲良醫也、
不學而勇、不學而剛者、不得爲良醫也、
學而勇、習而剛者、便是真良醫、

▲トラホームの根治療法

特別會員 石阪直次郎君

先づトラホームの療法につき眼科學の泰斗グレイフェ氏が述べたる獎言を語り、次で自己の遭遇したる悲惨なる二個の實例を舉げてトラホーム豫防の必要を陳べ、更に

療法に論及し、トラホームの原因は今日未だ諸家論争の中に在りて不明なるを以て原因療法を施す事を得ず、されば藥物療法と手術療法の外に方法なく、藥物は今日迄、沃度、イヒチオール、カヒストール、拘襞酸銅、テトラミン等種々のもの試用されたるも何れも其奏効の度に至つては硝酸銀、硫酸銅に及ばず、然れども實地上藥物療法のみにては奏効不確にして根治的手術の必要な場合多く、根治的手術も諸種の術式あれど擦過法、及び壓搾法尤多く奨用せらる、何れにもせよ、手術の要件は(一)手術法簡易にして(二)患者に苦痛を感せしめず(三)顆粒は出來得る限り除去し得て其再發を防ぎうるものは理想的手術なり、然るに本年の初に河本博士はトラホーム診斷の反應藥(食鹽結晶)を發見せられたり、此原理は未だ不明なれど氏は重曹の同一反應を呈する事を研究せられたり、而して氏は該反應藥に依つて明に現出したるトラホーム除去につき簡單なる手術法研鑽の結果左の方法を案出せられたり、之に使用する器械は直鎗狀刀とクナツプ氏輪狀鉗子にして氏は之を用て二十九名の患者に試みられ能く要求に協へりと、術式を簡單に述べればブラウン氏液を結膜下に注射し眼瞼結膜に食鹽の結晶を塗布して之を洗滌すれば顆粒は微細なるもの迄悉く現はるゝを以て之を直鎗狀刀にて表面のみ亂切し、殊に内外眥部、上

下眼瞼移行部の邊は注意して之を亂切す、かくすれば病竈以外を傷けずして安全に、且微細顆粒に至る迄確實に除去する事を得べく、手術後は刺戟なき爲め一日程繃帶せしむるか又は時に之を施さざるもよし、手術後顆粒の存否尙疑しき時は更に反應藥を用て殘存する時は再び除去す、而して微細なる顆粒迄除去し得るを以て恐くは再發なかるべしと。

▲試驗食

林 講 師

胃液中の酸量を定むる爲使用せらるゝ試験食品に就きては、エーワルド、ポアス、ロイベ、リーゲ、クレンペレル、諸家の法あれども主として肉食品にして日本人は糲粉食が主成分なり、されば諸氏の方法は我邦人に不適當なれば通常長與博士の麵麩食を用ゆ、然れども田舎人は多く之を嫌ふものなれば強て使用すれば遊離鹽酸は定量以下の場合多し、されば都會及田舎人の共に好で之を食ひ以て胃粘膜に適當の刺戟を與へて消化液(胃液)を分泌せしむるものならざる可からず、而して各個人の嗜好奈何によりて胃液分泌に多少あるは明に動物試験の之を證明する所にして試験食品の要件としては更に一定の標準ありて而も何處にても容易に求め得るものなるを要す、麵包は都會の人には適當なるも田舎人には團子適當にして即米を細磨して篩にてこし之に少量の食鹽を入れ挖ね之を

熱して製造すればよし、氏は麵包と比較して穀粉九十六グラム（一合半）に食鹽〇、五を入れ之を一個の團子として製造し用に臨みて蒸す時は柔軟ならしむる事を得べし、此團子を用て麵包を與へて遊離鹽酸量の少き陰性のもは多く分泌し來りたり、氏は五名の患者に之を試用して得られたる成績（一）例は麵包にて遊離鹽酸全く陰性なりしが之を用て〇、〇三六五を得（二）例は〇、〇五一のもの増加して〇、〇七三となり（三）例は〇、一〇五九のもの〇、一四六に増加し（四）麵包にて全く陰性なりしが之を用て尙陰性なりき（本患者は胃癌）（五）例は〇、〇三六五のもの之を用て遊離鹽酸なくなりしも本患者は富山市の者にして團子を嫌ひしもの也。他の四例は何れも田舎人なりき、されば都市人には麵包を與へ田舎人には團子を用ゆる時は各嗜好に適合せるものなるべしと。

▲温の經濟

櫻井教授

教授は嘗て獨乙國發刊の某雜誌にコックホケステンてふもの、記事を讀まれしが今回新に歸朝せられたる友人より獨乙にては之を盛に使用しつゝある事を聞知せられ、非常に便利なるものなれば出來得る限り廉價に製作せんとて試に作成せられたる模型品を供覽し、合せて之れにて飯を炊いで實見せしめられたり、其構造の大要は厚さ五分程の板にて蓋ある正立方形の箱を造り其中に鍋を乗す

る如き球形の穴を穿らたる臺を入れ其周邊には温の不導體なる物質例之牽屑を入れ、其上方には出入自由の爲特に適當なる布團を乗せたり、此箱の構造の要點は温の不導體にて圍みて鍋の有する熱を長時間保有せしむる目的なり、此箱にて飯を炊くには鍋に米と水とを等分に入れ初は通常の炭熱（又は瓦斯）にて凡十分乃至十五分間熱を與へ之を箱内の鍋の掛るべき中央の凹窩に乗せ之に布團をかけ蓋を施して凡四十分間を経過せば立派に炊げる飯を得べし、而して此法に依る時は（一）薪又は炭熱にて煮沸する時と異り焼け附く憂なし（二）通常の煮沸法による時は水分は沸騰して流出する爲め大切の含水炭素流出して糖分を失ふも本法には此憂更になし、（三）毎日毎度同様の飯を得る事（四）味は此法による時は餘程良し（五）旅行等をなさんとする時には前晚の中に準備し置く時は如何に早くとも暖き飯を食ふ事を得る等諸種の利益ありて而も温の經濟更に露骨に言へば財政の節減に大に影響するもの也、此箱は飯の他牛肉、馬鈴薯煮沸にても宜し、馬鈴薯等は温めたる水分を共に箱の中に入れ置く時は柔か過ぎるを以て其温められたる水分は箱に入るゝ前、傾除する方宜しと洵に至便にして、しかも經濟的の考案なるかな。

▲良性幽門狹窄に胃腸吻合術を施せる二例

宮田 教授

先づ順序として幽門狹窄の原因及症候を簡潔に陳べられ次で該患者の外科的療法として(一)幽門成形術はハイチツケ及ミクリツツ氏の法に従ひ大約六仙迷を極度として幽門狹窄部を縦切開し其創口を横に縫合す此法は簡單なれども浸潤又は癒著あれば行ふ事を得ざる場合多く(二)胃成形術は主に癥痕狹縮の爲に砂漏斗状をなせる胃に行ふ法にて前法の如く縦切開して之を横に縫合す又絞縊の両半を切開して吻合す(胃吻合術)、(三)胃腸吻合術に二種あり其一是胃十二指腸吻合術は通常手術困難の爲に行はず、他はウエルフレル氏が初て行ふたる胃空腸吻合術にして此中主として、使用せらるゝは前結腸前胃空腸吻合術及後結腸後胃空腸吻合術にして此他後結腸前胃空腸吻合術あれども實地に用ゐられず、本手術に於て胃の穿孔部位は成るべく低き處にて大彎の近傍、出來うれば幽門に近き處宜しきも止むを得ざれば胃底に行ふ事あり、切方は大彎に平行に切るべし、腸管は前結腸前胃空腸吻合術の時は十二指腸空腸皺の下凡五〇^{C.M.}の處を持來り通常方向は百八十度廻轉して結合す、後結腸後胃腸吻合術の際には空腸の上部を持來り廻轉せずして結合す、而して其胃腸縫合術としては(一)レムベルト氏は針尖を粘膜面を傷けずして漿液膜及筋層をのみ刺通し、兩漿液膜

面を縫合に依て互に相接着せしむるものなれども其縫合弱くして離るゝ恐あり、(二)チエルニー氏は前法と同じく漿膜及筋層を刺通するものなれども第一列の縫合の上に向第二列の縫合を施すものにて手術の成績よく主に此法を用ゐらる、(三)佛醫ヨーベルト氏はレムベルト氏法の如く兩漿液膜を互に接著せしむるものなれども異なる所は腸管の全層を通じて針を穿通するに在り、此法は針孔より腸の内容物腹腔内に竄入して炎症を起す危険ありて用ゐられず、以上の縫合は結節縫合又は連次縫合(チルマンズ氏)にても宜し、(四)米醫ムルヒー氏卸の兩環を上下の腸管端に挿入し吻合に依つて固定すれば兩環内の腸壁は壞疽に陥り早ければ八日、通常は二週間内に肛門より排出せられ、外部は炎症癒合するに至る、此法の利益は手術の迅速に出來得るとなれども欠点として卸挿入部の腸管廣く壞疽に陥りて穿通性腹膜炎を起す危険あり且壞疽部下排せずして胃に上昇し來りて異物となるとあり、合併症としては(一)横行結腸壓迫の爲にイレウスを起すとあり、(二)時を経れば縫合せる部の狭くなる事あり、(三)大切なるは不正循環にして腸内容上昇し胆汁及脾液は胃に逆上し來りて之を吐出し不良なる時は五日乃至十日にして鬼籍に上ると有り、而して教授は最後に二名の幽門狹窄患者に胃腸吻合術を實驗せられ

たる経過を陳べられたり、即一名は四十三歳の男にして
 嘗て胃潰瘍を患へたる結果幽門部に近く癥痕收縮ある砂
 漏斗胃を有する患者に胃腸吻合術を施し、に始は滋養
 腸の必要ありしもの之をなすの要なく入院當時体重四十
 一^{K.G}なりしが四週間にして四十四^{K.G}に増加したりと、他
 の一名は三十八歳の女にして若き頃胃潰瘍に罹り手術前
 は胃は恥骨縫際の上部下垂し吐嘔は一日一乃至三回あ
 りしも現今は全く歇みて食欲亢進を催し來りしと謂ふ。

▲閉會の辭

金子部長

かくて本學年の講話會も名殘惜しくも終了した、彼は卒
 氣なしに辭し去るけれども、我は何かなしにホロリとす
 るばかりだ、此時混沌たる闇はその影なき翅を擴げて音
 もなく我眼を蔽ふた、すると何處よりとも無くさやけき
 明星の光がチラリとさも懐しげに輝いた、キッ、ヨとして
 思はず眼を見張つた、ア、此の刹那の微妙な心持は
 ハッキリ口に言へぬ、辭に表はしぬ……………。(完結)

○第二回陸上運動會

記録係

吾校運動會第三回の誕生日たる十一日は丁度小立野方
 面の大掃除日と相當するので止むを得ず十二日とせられ

たが當日は雨、十三日はと思つたがこれも雨まよ明日
 限りで無期延期と云ふ運命の運動會だ如何に涙ある天と
 は云へあまりにいらぬ涙を御愛興かは知らぬぞふりまき
 すぎると膽を冷したが幸ひ十四日は快晴とまでは行かぬ
 が先以て運動會には御詔へむきだ風もない

會場雜觀

病院正門前は例年の百尺竿頭に翻る大國旗門前雀羅な
 らぬさゝかにの糸の如くに引張られた萬國々旗は吹く朝
 風にひらひらして居る

先づ綠門を入れば例の噴水だ浮世は廻る小車とても云
 ひたい、これから左に折れて行くと自然に會場に誘はれ
 行くのた

第一番に右手にひかへたるは醫四館の催し標本陳列館
 である本年は霞會とやらの繪畫展覽を兼ねるとやらで差
 す手ならぬ差す足引く足の絶え間なく狭き戸口の雜沓な
 んど云ふばかりなした

あやめ館草藥館を始め各館の面々思ひ思ひの意装を凝
 らしてひかへられた但し今年は何だか物足りぬ感かした
 も道理何館とやらが缺けて居つた

會場は正面に少しく高く構へたるは會長席これから左
 右に幔幕引廻したるは來賓席其他それれ何れも場内装
 飾至らざるなし

第十會雜誌第五十四號

時去り時來り愈場内騒然遂に一發の號と共に第三回陸上運動會の序幕は開かれた時丁度九時半

本日の競技を擧ぐれば次の如しだ

第一回 二丁競走

一着 豊田今吉郎 二着 田邊景介

第二回 戴囊提灯競走 (一分二十秒)

一着 宮島卯吉 二着 山田有登

第三回 二人三脚競走 (五十秒)

一着 廣田賢藏 二着 植島寛二
橋本眞一 松山金次郎

第四回 武裝競走 (三分十秒)

一着 館 昌次 二着 小山角次郎

第五回 戴囊スパン (四十五秒)

一着 富家久雄 二着 國吉眞才

第六回 四丁競走 (一分八秒)

一着 豊田今吉郎 二着 荒川修藏

三着 辻口文吉

第七回 化學競走 (五十二秒)

一着 酒井謙二郎 二着 島 亮二

第八回 出世競走 (三十秒)

伏せ置かれたる題に相當する假裝面を附けて走るもの

満場の笑となる

一着 山田有登 二着 岡 久雄

第九回 百鬼夜行 (四十五秒)

二人脊を對して其の膊を結び互に仮面を付て横走す抱腹絶倒

腹絶倒

一着 小暮喜一 二着 家本品太郎

大田卯三郎 廣瀬 勇

第十回 二丁競走 (三十秒)

一着 中原徳彌 二着 山川匡男

第十一回 戴囊提灯競走 (一分間)

一着 高橋房次郎 二着 藤澤好彦

第十二回 障碍物競走 (一分十秒)

一着 磯貝一實 二着 本 正 生

三着 鈴木嘉一郎

第十三回 カツポリ競走 (二分三十秒)

一着 國吉眞才 二着 佐藤 進

第十四回 二人三脚競走 (三十五秒)

一着 高儀 京治 二着 角田耕六

武者素行 山田有登

第十五回 竹馬競走 (一分三十秒)

皆荒馬と見へて多くは落馬し決勝点に入る者僅に一人

一着 野島利一

第十六回 制歩競走 (四十九秒)

一着 安澤 一清 二着 若槻 芳隆

第十七回 戴囊スパン (四十五秒)

一着 富家 久雄 二着 村松 純吉

第十八回

一着 柴野 昇 二着 高儀 京治

三着 田原 利崇

第十九回 操り競走 (四十五秒)

操る者口を被ひ操らるゝ者は眼を被ひて二條の糸にて操るなり衝突轉倒滑稽を極む

一着 吉川 六郎 二着 安場源四郎

一着 近藤 一怒 二着 清水 仙岳

第二十回 竹馬競走 (二分四十秒)

一着 荒川 修藏 二着 長 外喜男

第二十一回 六丁競走 (二分五十秒)

一着 和田 政範 二着 小山角 二郎

三着 板谷 外之助

晝食一時間休憩

第二十二回 跛者戴囊 (四十五秒)

一着 相馬伊五郎 二着 村松 純吉

第二十三回 救急競走 (二分五十一秒)

一着 角田 眞一 二着 杉原 周輔

馬場・庄江 廣瀬 勇

第二十四回 出世競走 (三十五秒)

一着 岡 久雄 二着 廣瀬 勇

第二十五回 武裝競走 (二分四十五秒)

一着 本 正生 二着 上野 善造

三着 齊藤 金則

第二十六回 一人一脚 (三十秒)

一着 矢能 孝治 二着 高儀 京治

第二十七回 戴囊提灯 (五十秒)

一着 高橋房太郎 二着 中山 富次郎

第二十八回 重荷競走 (四十五秒)

一着 堀 孝信 二着 大西 俊明

三着 吉澤 榮三

第二十九回 二人韓信競走 (四十五秒)

大の男が股をくぐり出る様面白しとみわかし

一着 寺境壽貞三 二着 山角 彙晏

富家 光雄 永野 保

第三十回 障碍物競走 (二分四十秒)

一着 本 正生 二着 中原 德彌

三着 表 宣明

第十會雜誌第五十四號

第三十一回 出世競走 (四十秒)

一着 柴野 昇 二着 武永義長

餘興綱引

一年甲組對乙組應援の聲天地に轟く争ふこと一分間遂に勝利は甲組に歸した忽ち密柑の雨

第三十二回 二人三脚 (三十五秒)

一着 加藤 末吉 二着 大井藤二郎
荒川 修三 富家 光雄

第三十三回 一哩競走 (六分四十秒)

流石は一騎當千の面々良く急かす追らず火の息を吹いて戦つた、結果はこうだ

一着 ①中村喜太郎 二着 ⑤和田 政範

三着 楠田 利一 四着 田原 利崇

五着 萩原 忠

番外自轉車徐行競争

一等 杉内 常次 二等 横江 早三郎

三等 館 保三

第三十四回 板カン競走 (三十秒)

一着 加藤 末吉 二着 須賀 芳篤

第三十五回 百鬼夜行 (五十一秒)

一着 中田 徳二 二着 上野 善三
寺境 壽真三 富家 光雄

番外職員自轉車徐行競走

第三十六回 化學競走 (二分四十五秒)

一着 島 亮二 二着 佐々木武雄

第三十七回 竹馬競走 (二分十五秒)

一着 中谷 三綱

第三十八回 市内尋常小學校生徒競走 (三十秒)

一着 材木町小學校 二着 材木町小學校

三着 味噌藏町小學校 四着 材木町小學校

五着 材木町小學校

番外第四高等學校講習寮對公認下宿綱引

第一回 四高勝 (一分四十秒)

第二回 全 (一分五十五秒)

市内高等小學校選手競走 二周 (二分十秒)

一着 二着 三着 共に小將町高等小學校

第四十回 來賓戴囊スポン競走 (五十五秒)

一着 津 島 氏 二着 渡 邊 氏

三着 石 坂 氏

番外自轉車競走 松井 啓

第四十一回 職員競走 (五十五秒)

一着 田中 講師 二着 押 野 氏

第四十二回 各學校撰手競走(六丁) (一分五十五秒)

一着 工業學校 二着 第二中學校

三着 工業學校
第四十三回 高等學校撰手競走(六丁) (一分四十五秒)

一着 三部宮田 二着 三部坂本

三着 三部石渡 四着 三部吉田

五着 一部中村

第四十四回 小使競走 (二分十秒)

一着 矢部 二着 宮部

三着 南 部

第四十五回 各級撰手競走

何れ劣らぬ勇士の面々應援聲裡に出發した

一着 廣田賢藏 二年(一分四十四秒)

二着 高儀京治 四年(一分四十六秒)

三着 豐田今吉郎 二年

四着 泉吉守 三年

五着 源明藤吉 一年

汗半干の健兒が待ちに待ちたる第三回運動會はかくして
目出度萬歲聲裡に午後六時と云ふに終りをつけた。

○第三回春季陸上運動會役員

會長 高安右人
委員 長 櫻井小平太
審判掛長 金子治郎
競技掛長 阿部莊二

番組掛長 宮田篤郎
會場掛長 山崎幹
衛生掛長 佐々木達
庶務掛長 村上庄太
審判掛委員

高山基重 三木榮末
笹井仁作 影山清美
佐復源太郎 中野鑄太郎
醫四 小野澤庄桂 醫四 吉田隆次
醫三 中村喜太郎 醫三 佐藤祐造
醫二 岩瀬國義 醫二 荒川修藏
醫一 小泉與四郎 醫一 高橋邦次郎
藥二 横江宇三郎 藥三 廣瀬立哉
藥一 今澤義三郎 藥二 笠上由松
藥一 小幡富三郎

松原三郎 佐々城清臣
福岡喜洋 芦澤孝治
高木球磨 吉田宗一
青木他吉郎 俵他喜三郎
醫四 高儀京二 醫四 鈴木伊作
醫四 長井敬孝 醫三 絹川義温

番組掛委員

醫三 轟 茂	醫三 板谷外之助
醫二 中原 德彌	醫二 佐藤 進
醫二 大中 貞次郎	醫二 加藤 末吉
醫二 米多 外男	醫一 北野 榮藏
醫一 行事 喜作	醫一 篠田 嘉年
藥三 三野 泰次郎	藥三 森 善次
藥二 大村 政太郎	藥二 矢野 孝次
藥二 柳町 茂家	藥一 松井 正倫
藥一 佐々木 武雄	

會場掛委員

加藤 靜雄	中島 愛次
林 常雄	松田 菊治
村田 金太郎	山本 直枝
醫四 村井 勇作	醫四 佐竹 秀一
醫三 馬詰 定衛	醫三 北川 文松
醫三 鈴木 英男	醫二 加瀬 順之助
醫二 村松 純吉	醫一 木下 熙
醫一 正印 義正	醫一 丸山 浩平
藥三 中山 富次郎	藥二 牧野 新之丞
藥一 岡部 千太郎	藥一 吉澤 英三
石川 喜直	山本 兵三郎

衛生掛委員

田中 一次郎	林 篤
池田 菱吉	佐口 榮
野崎 芳孝	押野 與吉
吉野 巖	柴野 順吾
鷹見 義郎	館 保二
藤森 千春	中村 余所吉
八島 為晴	醫四 近藤 清吾
國吉 真才	醫四 茨木 忠俊
成田 高仁	醫四 宮城 篤珍
太田 尙男	醫三 生沼 重次
武者 素行	醫三 矢吹 清
泉 吉守	醫二 延川 清
醫二 武田 良海	醫二 志村 猪藏
醫一 岩田 高明	醫一 赤澤 眞次郎
醫一 宮竹 介次	醫一 上島 耕治
醫一 鳥居 環	藥三 岡部 郁二郎
藥二 松永 清一	藥二 後藤 重彦
藥二 住山 伊平	藥二 川崎 幾左右
藥一 松田 卷耳	藥一 館 昌次
鬼頭 英	醫四 吉尾 開道
丹羽 直	醫四 松村 喜一

醫二 米山 健
醫一 五十嵐 齊
藥三 治多 信章

庶務掛委員

山本 兵三郎
川島 俊
崎田 誠四郎
安達 友直
醫四 津田 次助
醫三 吉川 六郎
醫二 三國 範三
醫二 片岡 正雄
藥三 中村 重好
藥三 酒井 謙治郎
藥一 松井 啓

○弓術部射初式の記

維時明治四十有二年初春、屠蘇の清香漸く消れて、庭前の梅花そゞろに其芳薫を運び黄鳥そが朗々たる美韻を弄び、瑞氣内外に溢るゝ紀元節の佳辰を卜して、本校弓術部射初式は舉行せられたり。抑も射初式たるや遠き古は竹の内に於ける主要なる儀式の一なりしも、時變り星移るに従ふて典儀漸く頽れて、今や其雲翳を殘さざるに到れり。ア、これ正に我武士道精華の衰頽に歸すべきか、否々然らず、只暫時其形態を潜めてポテンシアルエチルギーの状態に止りしもの、今や再び其エチルギーの

發して我十全會の頭上に現れ來れり。これ大に吾人の誇賞に價するところなり。

場の修飾、措置、總て古式に倣ひて、壯嚴靜肅を極め各有志交互に出て、式を行ひ、一進一退能く規矩に準じ、吾人をして轉た古武士の面影を髣髴せしめたり。

此日高安會長を甫め、山崎、佐々木、村上、石川の諸教授臨席せられ、非常の賑況を呈しぬ。

當日出演の士左の如し、

弓術師 範八島爲晴先生 近藤時男 大島時 山田彦十郎 金澤病院醫員 鷹見義郎君 佐々木武雄 石丸弘毅 教務課員 大島順君 鳥居環 長外喜雄 奥山義盛 角田眞一

○柔道大會

三冬の嚴寒をものともせず、國家の干城を以て自任しつゝ、飛雪繽紛面をうつの夜なく、颯風を冒し、雪をけつて、通ひつめし勇武の士や意氣衝天の思ひをなしつつ、^{はた} 派の場所に、腕なみ見せんづものと、待つこと切なりき。時は來れり、二月二十七日我か柔道大會は、濟々堂に開かれぬ。

櫻井副會長、石川部長、宮田教授を初め諸先生の出席あり。この日や、快晴一点の雲なく、看客は滿場立錫の餘地なきまでに充たされ、霸氣堂に溢れたり。

先づ、藤森千春、吉田宗一兩氏の審判の下に三本勝負より開始せらる、待ちこがれたる數十の玃、各々鐵腕を戦ふさま勇ましく、思はず手に汗せしめぬ。

次に、四年間寒稽古皆勤者、佐竹秀一、須賀芳篤、平野郷二郎、大井藤二郎の四氏に金牌の授與あり。本年の寒稽古皆勤者、平野郷二郎以下三十名に、證書の授與を、有効賞受領者吉田宗一、吉川友信兩氏に、目錄及び銀盃一組づつの授與を終りて、北野榮藏、佐竹秀一兩氏の講道館五つの形あり。坪倉利、村上錦六兩氏の講道館投の形あり。各學校撰手勝負あり。終りに、本日唯一のみものたる、選抜勝負は、開始せらる。出場者三十餘名、いづれ劣らぬ屈強の勇者なり、嗚呼當日の月桂冠、誰れの手に落つべきやと、肩を怒らし手を握りてまつ、就中四高の岸本、一中の神田、二中の山下等、奮闘最も相つとむ、げに血わき、肉ちぎるの感切なりしが、遂に名譽の一振は、一中辻政儀氏の占むる所となれり、之れ唯獨り一中の名譽のみならんや。

時に晚鐘一拆、日は將に西海にわたんとす、花々しき大會は終りをつげぬ。(掬翠記)

當日大會に於て、進級せしもの左の如し。

村上錦六、行事喜作、北村榮藏、池上豊、北村祐壽。右一級に昇進せしむ。

本正生、神谷喜男、的場貞行、坪倉利、植西武彦。右二級に昇進せしむ。

平野郷二郎、須賀芳篤、大井藤二郎、八賀重藏、竹宮介次。右三級に昇進せしむ。

青木伸一、坂井貞準、山岸勘六、室田藏人、小幡一志、宇賀治元造、竹内善松、角田耕六、田邊鼎介、佐竹仁三、田原利崇、笠島宗之、織田時平、山角彙晏。第四級に昇進せしむ。

寒稽古皆勤者芳名左の如し。

佐竹秀一、平野郷二郎、須賀芳篤、大井藤二郎、角田耕六、坪倉利、小幡一志、池上豊、行事喜作、村上錦六、北野榮藏、本正生、神谷外喜男、植西武彦、宇賀治元造、笠島宗之、廣田賢藏、山角彙晏、青木伸一、田原利崇、佐竹仁三、室田藏人、田邊鼎介、正印義正、渥美徳太郎、井上又吉、野澤余吉、赤澤眞二郎、坂井貞準、村山三男三郎、北浦徳太郎 (姓名不順)

○ 劔道部記事

委員

劔道大會

滔々たる天下學生の氣風墮落して其の極に達する今日、獨り我校劔道部員は体を練り、膽を鍛ふを是れ事とし、俗風外に超然として染まざる吾人、實に、稍々意を強うすべきか、嘗て明倫堂を蹂躪して以來、久しく事なく、各自驕肉の嘆あるの慨あるや、時を失せず二月二十八日を以て劔道大會は舉行せられぬ。諸君の歡喜思ふべし。朝來の櫛風沐雨を事ともせず、午前十時を報ずる頃は、待ちに待ちし我校垂百の劔士は、日頃の手腕をあらはさんと、濟々堂裡に雲霞の如く寄せ來り、忽ち滿場立錐の餘地もなきに至りぬ。聽て時刻到りしかば、一本勝負より甫まりける。其の拔群の功名をあらはせし勇士は

本 正生 小山角次郎
角田 耕六
の三氏なりき。

次で、午後一時より、三本勝負は開かれぬ。名にしたふ當校俊傑の技を闘はし、術を競ふもの、意氣軒昂、健腕竹刀を揮ひ、七離八合、猛虎の嶋より、蛟龍の天を衝かんとするの慨あり、就中、外來他校の撰手對我校撰手

の勝負に至りては、壯絶快絶、將た、何物か之に比せん、一進一退、電光石火も只ならず、離合集散神出鬼没の妙技、覺へず、觀者の掌を握らしむ。回を重ねる事凡そ四十三回午後五時會を閉づ。

其組合次の如し

○ ○ (川崎幾左三郎)	○ ○ (廣瀨玄也)	○ ○ (野島利一)	○ ○ (荒川武彦)	○ ○ (齋藤申吉)	○ ○ (長外喜雄)	○ ○ (角田耕六)	○ ○ (中山富三郎)	○ ○ (野村善次)	○ ○ (野村善次)	○ ○ (小西正信)	○ ○ (文室貞吉)	○ ○ (根布貞吉)	○ ○ (西永義長)	○ ○ (二中)
○ ○ (金田友三郎)	○ ○ (畑千榮)	○ ○ (板谷外之助)	○ ○ (藤岡孫一喜)	○ ○ (白竹秀一)	○ ○ (佐野郷次郎)	○ ○ (廣瀬竹次郎)	○ ○ (板谷外之助)	○ ○ (泉吉守)	○ ○ (永野保)	○ ○ (中野健吉)	○ ○ (廣瀬信定)	○ ○ (越田次次)	○ ○ (館田次次)	○ ○ (志村猪藏)

- | | |
|---------------|----------------|
| ○小中
久高唯源忠治 | ○四高
富田國治 |
| ○師
樽見善次 | ○監
四ツ谷喜太郎 |
| ○警
篠田芳吉 | ○二中
土生脇齊 |
| ○源
明藤吉 | ○〇〇
五十嵐 |
| ○〇步七
蓬萊豐吉 | ○〇商
向田隼吉 |
| ○〇四高
進藤隆一 | ○〇一
中渡邊兵四郎 |
| ○〇商
池上吉豐 | ○〇師
北川勝一 |
| ○〇四高
小治武治 | ○〇〇監
福島茂三郎 |
| ○〇警
高桑為藏 | ○〇〇步七
竹部了觀 |
| ○〇二中
佐々木文三 | ○〇一
中渡邊兵四郎 |
| ○〇〇
岡部千太郎 | ○〇〇一
中北村清太郎 |
| ○〇四高
榑藤末吉 | |

此日、櫻井副會長、高山部長の臨席あり。來賓には、本校諸先生及び本校出身諸君にして、本校生徒他校撰手多數來會し、なかなか盛會なりき。

寒稽古皆勤者及進級者

北風凜々として、峭寒骨に徹し、六花霏々として、面をうつの嚴冬三旬、積雪を踏破し來る剛膽不撓の士、すへて四十名、これぞ、濟々堂場裡、劔撃の聲に行人をし

て啞然たらしめたる、血氣鐵腕の若殿原なりける。

いでや左に其の姓名を列記せん。(いろは順)

- 大野 幸重 高澤 冠一
本 仙太郎 森 善次

右四氏は在學年中劔道寒稽古皆勤せられしにより特に勤績金章を賞贈せらる。

- | | | |
|--------|-------|--------|
| 岩崎省三 | 池上 豊 | 畑 千尋 |
| 端谷 豊吉 | 長 外喜雄 | 大武 國治 |
| 大野 幸重 | 岡部千太郎 | 岡田 申吉 |
| 渡邊八之進 | 川崎幾左右 | 金田友三郎 |
| 角田 耕六 | 加茂 知榮 | 永野 保 |
| 高澤 冠一 | 武内 勉二 | 館 昌次 |
| 中山富次郎 | 向井喜内 | 内田 憲男 |
| 野島 利一 | 寛永義長 | 源明 藤吉 |
| 藤岡 孫喜 | 小山角次郎 | 鹽谷 直作 |
| 齋藤 金則 | 北村清太郎 | 菊田 文雄 |
| 御影 藤太郎 | 宮島 卯吉 | 白木 孝一 |
| 篠田 嘉年 | 島 豊喜 | 廣瀬 竹次郎 |
| 廣瀬 玄武 | 本 仙太郎 | 森 善次 |
| 鈴木 忍 | | |

上記皆勤者へ皆勤證書を、左記の諸氏は、今回進級の榮に預りしに由り、進級證書を授與せらる。(いろは順)

二級に昇進せし者

池上 豊

大武 國治

加藤 末吉

絹川 義温

御影 藤太郎

三級に昇進せし者

岡部 千太郎

笠上 由松

館 昌次

北村 清太郎

志村 猪藏

四級に昇進せし者

畑 千尋

根布 貞吉

永野 保

寛永 義長

北村 信定

北島 辰次郎

源明 藤吉

菊田 文雄

五級に昇進せし者

長 外喜雄

岡田 申吉

角田 耕六

加茂 知榮

武内 勉二

中山 富次郎

向井 喜内

藤岡 孫喜

齋藤 金則

島 豊喜

廣瀬 竹次郎

鈴木 忍

有効章受領者

卒業生田中三彌君、在學中劍道部に對する功勞を頌し、有効章銀牌一個授與せられたり。

○下平教授の轉居

Y. Shimodaira

Sellerstrasse 27, Bern, Schweiz.

○金澤醫學會ノ設立

我北陸ニハ夙ニ我校十全會ノ在ルアレモ未タ純然タル醫學會トシテ目シ得ヘキモノニアラズ縣市郡ニハソレトモ醫師會ノ成立ヲ告ケタレトモ單ニ醫師業務上ノ組合ニ過ギズ僅ニ醫事集談會ナルモノアレトモ會員ノ數タル僅ニ十數名ヲ出デズ吾人ノ常ニ遺憾トセシトコロナリ然ルニ斯學研究ノ旺盛ナル純學的一大醫學會ノ設立ヲ要求シテ止マサルモノアリ本年五月十七日陸軍衛生部員醫專校教授及市内開業醫ノ主ナル者凡五十余名市内西町金谷館ニ會合シ會長ニ高安本校長ヲ推薦シ左ノ規約等ヲ編成シ金澤醫學會ナルモノ設立セラレタリ

○金澤醫學會規約

- 第一條 本會ハ醫學ヲ研究シ其進步發達ヲ圖ル
- 第二條 本會ヲ金澤醫學會ト稱ス
- 第三條 本會ハ醫學ニ緣故アル有志ヲ以テ組織ス
- 第四條 本會ハ隔月十日午後三時ヨリ六時迄例會ヲ開キ演說講話ヲナス
- 第五條 本會ハ毎年二回雜誌ヲ發行シ會況ヲ報告ス
- 第六條 本會タラントスルモノハ住所氏名ヲ記シ理事ヘ申込ムベシ

第七條 本會員ハ會費トシテ毎年一月金壹圓ヲ前納スヘシ

第八條 本會ニハ會長一名理事六名ヲ置キ會務ヲ處理ス

會長ハ互選理事ハ會長ノ指名ヲ以テ定ム

但シ任期ハ滿二ケ年トス

○同理事會協定規約

一會 場 大手町醫學專門學校内

一事 務 所 金澤市西町三番丁岡本小兒療院内

一本年度會費 本年度ハ滿一ケ年ナラサルモ創立ノ際ナルヲ以テ會費壹圓ヲ徵收スルコト但シ發會式日ニ於テ會計係ヘ拂込ムヘシ

一講 演 者 每會ノ講演者ハ陸軍側專門學校金澤病院側及開業醫等側ノ三團體ヨリ各二名宛ヲ出シ其他ハ飛入勝手タルヘキコト但シ講演者ハ必ス原稿ヲ持參シテ之ヲ編輯係ヘ交付スヘシ

一演說 申込 講演ヲナサント欲スルモノハ必ス開會當月二日迄ニ演題ヲ會場係ヘ申出テラルヘキコト但シ顯微鏡等ヲ要スルモノハ同時ニ申添ヘラルヘシ

一討 論 討論者ハ則席ニ於テ要点ヲ自抄シ編輯係ヘ交付スヘシ

一傍 聽 當分會員以外ノ傍聽ヲ許サス但シ特ニ會

一入 長ノ承認ヲ經シモノハ此限ニ非ス

會 新ニ入會セントスルモノハ時期ノ早晚ニ拘ラス其年度ノ會費壹圓ヲ納ムヘシ但シ其年度ノ會報ノ全部ハ之ヲ交付ス

一雜 誌 名 ハ「金澤醫學會會報」ト稱ス

○理事分掌

會計係 加藤 慶三 (金澤病院眼科教室)

會場係 林 篤 (金澤病院内科第二部)

編輯係 三木 恒男 (第九師團軍醫部)

同 遠山 一二 (同上)

庶務係 米村 吉太郎 (胡桃町呼吸器病院)

同 岡本 京太郎 (西町三番丁)

次ヲ本月十日第一回例會ヲ開キ、來會々員六十餘名、左ノ講演アリタリ吾人ハ切ニ同會ノ穩健ナル發達ヲ希望シテ止マサルモノナリ

開會ノ辭 會長 高安 右人

盲腸炎診斷上直腸内檢温ノ價值 松村虎之助

肝脾腫大、腹水、黃疸等ニ定期的發作熱ヲ 佐々木 達

持久スル重病ノ一例 松原 三郎

精神病分類ニ關スル私見 山田孝太郎

砒素疹ノ一例

會 告

○寄贈ヲ受ケタル雜誌及書籍

(六月二十日迄領取ノ分)

日本醫事週報	七四、迄	同	社	岡山醫學會雜誌	二二、迄	同	會
醫海時報	六三、迄	同	社	研瑤會雜誌	九〇、迄	同	會
東京醫學會雜誌	二三ノ二、迄	同	會	廣島衛生醫事月報	二五、迄	同	社
東京醫事新誌	一六九、迄	同	社	静岡縣醫學會々報	二四、迄	同	會
日本眼科學會雜誌	一三ノ五、迄	同	會	鎮西醫報	三〇、迄	同	社
中外醫事新報	七二、迄	同	社	東北醫學會々報	五、迄	同	會
軍醫團雜誌	二、迄	同	團	莊內醫學會々報	七、迄	同	會
順天堂醫事研究會雜誌	四七、迄	同	會	躬行會叢誌	四、迄	同	會
治療新報	八七、迄	同	社	藥學雜誌	三七、迄	同	會
大日本私立衛生會雜誌	三三、迄	同	會	藥石新報	六二、迄	同	社
成醫會月報	三六、迄	同	會	治療樂報	四、迄	同	社
北海醫報	九ノ一、迄	同	會	助産ノ榮	一五、迄	同	會
京都醫學雜誌	六ノ二、迄	同	會	千葉縣醫學專門學校々友會雜誌	四	同	會
臺灣醫學雜誌	七、迄	同	會	醫事新聞	七三、迄	同	社
				產科婦雜誌	二四、迄	同	會
				日本助産婦新報	三三	同	所
				神經學雜誌	八ノ三、迄	同	會
				醫學中央雜誌	五、迄	同	社
				國家醫學會雜誌	二五、迄	同	會
				北越醫學會々報	一六、迄	同	會
				中央醫學會雜誌	八五、迄	同	會
				藝備醫事	一五、迄	同	社
				岡山醫學會雜誌	二二、迄	同	會
				廣島衛生醫事月報	二五、迄	同	社
				静岡縣醫學會々報	二四、迄	同	會
				鎮西醫報	三〇、迄	同	社
				東北醫學會々報	五、迄	同	會
				莊內醫學會々報	七、迄	同	會
				躬行會叢誌	四、迄	同	會
				藥學雜誌	三七、迄	同	會
				藥石新報	六二、迄	同	社
				治療樂報	四、迄	同	社
				助産ノ榮	一五、迄	同	會
				千葉縣醫學專門學校々友會雜誌	四	同	會
				醫事新聞	七三、迄	同	社

第四高等學校北辰會雜誌 同 會

三重縣立第一中學校々友會雜誌 同 會

大日本耳鼻咽喉科會々報 同 會

好生館醫事研究會雜誌 同 會

皮膚科及泌尿器科雜誌 同 會

臨床彙講 同 會

石川縣師範學校友會雜誌 同 會

眼科臨床醫報 同 會

東洋醫事新報 同 會

福岡醫科大學雜誌 同 會

道修藥報 同 會

大阪醫學會雜誌 同 會

球陽 同 會

體育 同 會

龍南會雜誌 同 會

醫事月報 同 會

軍人後援新報 同 會

論文拔萃 同 會

人體解剖實習法 同 會

緒方婦人科學紀要 同 會

○自明治四十二年三月十三日校外十全會費納付調書

金 額 期 限 氏 名

金參圓 (自三十九年度至四十一年度) 三ヶ年分 喜多養元君

金參圓 (自四十二年度至四十四年度) 三ヶ年分 武田久米藏君

金貳圓 (自四十五年度至四十七年度) 二ヶ年分 高橋半也君

金貳圓 (自四十八年度至五十年度) 二ヶ年分 來間隆次君

金參圓 (自三十九年度至四十一年度) 三ヶ年分 齊藤義雄君

金九圓 (自四十二年度至四十四年度) 三ヶ年分 松田龜太郎君

金五圓 (自四十五年度至四十七年度) 七ヶ年分 森田齊次君

金參圓 (自三十九年度至四十一年度) 三ヶ年分 安澤綱三君

金參圓 (自四十二年度至四十四年度) 三ヶ年分 森 轍郎君

金參圓 (自四十五年度至四十七年度) 三ヶ年分 田中精一君

金參圓 (自三十九年度至四十一年度) 三ヶ年分 石川精一君

金參圓 (自四十二年度至四十四年度) 三ヶ年分 佐々木龜六君

金參圓 (自四十五年度至四十七年度) 三ヶ年分 山内順治君

金參圓 (自三十九年度至四十一年度) 三ヶ年分 山際房次郎君

金參圓 (自四十二年度至四十四年度) 三ヶ年分 廣山壽男君

金參圓 (自四十五年度至四十七年度) 三ヶ年分 近藤清吾君

金參圓 (自三十九年度至四十一年度) 三ヶ年分 伊藤善次君

金參圓 (自四十二年度至四十四年度) 三ヶ年分 杉内泰治君

金參圓 (自四十五年度至四十七年度) 三ヶ年分 小暮喜一君

第十金會雜誌第四號

金壹圓 全	金壹圓 (四十一年度)	金四圓 (自四十一年度至四十六年度六ヶ年分)	金參圓 全	金參圓 全	金參圓 全	金參圓 全	金參圓 全	金參圓 全	金參圓 全	金參圓 全	金參圓 全	金參圓 全	金參圓 全	金參圓 全	金參圓 全	金參圓 全	金參圓 全	金參圓 全	金參圓 全	金參圓 全	金參圓 全	金參圓 全	金參圓 全
----------	----------------	---------------------------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------

吉池省吾君	近藤勇記君	中川喜平君	西川英二君	徳久恒治君	松村喜一君	寺境壽貞造君	北村一清君	石川亥知君	杉山真二君	佐竹秀一君	西川良造君	大野幸重君	八賀重藏君	坪田義門君	近澤信盛君	安藤佐吉君	武波峰名君	識田信義君	平野郷治郎君	山本直板君	山々木茂樹君	佐々木茂樹君
-------	-------	-------	-------	-------	-------	--------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	--------	-------	--------	--------

金貳圓
(自四十一年度至四十二年分)

金參圓
(自四十二年分至四十四年分)

金參圓
(自四十四年分至四十六年度五ヶ年分)

金壹圓
(四十一年度分)

以上

心からよこしまにふる

雨はあらし

風こそよるの

窓はうつらめ

木下克雄君
大井藤治郎君
並河正雄君
山下銀吾君

廣告

故富田稔麿故石黒均造兩氏慰靈ノ爲不肖等主唱ノ下ニ各
位ノ同情ヲ仰キ候處左之通金員寄贈相成正ニ受領仕候條
感謝旁々御報告申上候追而熟議ノ上左之通決定不日手續
ヲ了ス可ク候間併テ豫告致置候

1. Nitze, Lehrb. der kystoskopie 1907.

2. Lehrb. der innere Melizi. S. von Mering 1903.

右二部母校十全會ニ寄贈

一、縦二尺五寸横一尺五寸不變色引延シ寫眞二葉

右兩君最近ノ寫眞ニシテ兩遺族ニ一葉宛寄贈

寄贈者氏名並ニ金員

金壹圓	山崎 幹	金五拾錢	櫻井小平太
金五拾錢	加藤 靜雄	金五拾錢	深美貞之助
金五拾錢	清水 秀夫	金壹圓	土田久三郎
金五拾錢	渡邊 十治	金參拾錢	橘 三九
金五拾錢	福岡 喜洋	金五拾錢	熊澤 清隆
金五拾錢	八田 智証	金五拾錢	吉住 保
金五拾錢	島 誠 郁	金五拾錢	森田 齊次
金五拾錢	鎌田 勘之助	金參拾錢	橘 薫
金貳拾錢	前田 匡俊	金五拾錢	野村 敏

金參拾錢	高松 岩吉	金貳拾錢	五井 康平
金五拾錢	千葉 玄也	金五拾錢	輕部 修一
金五拾錢	久津木 勝作	金五拾錢	千秋 了
金參拾錢	志田 主稅	金貳拾錢	河野 勇
金參拾錢	宇野 朗	金五拾錢	瓜生 保之
金五拾錢	齊藤 義雄	金壹圓	瓜生 尹重
金五拾錢	中川 嘉平	金五拾錢	原田 正廣
金五拾錢	野嶽 利七	金貳拾錢	富田 敦貴
金貳拾錢	鈴木 俊定	金參拾錢	澤崎 格二
金五拾錢	松村 魁	金五拾錢	七五三龜吉
金五拾錢	桑折 直	金參拾錢	岡田 虎介
金貳拾錢	三崎 玉雲	金貳拾錢	長谷川 葛
金參拾錢	三崎 吉太郎	金貳拾錢	木下 克雄
金貳拾錢	榊原 久	金貳拾錢	富田 繁
金貳拾錢	富田 繁之	金壹圓	林 政雄
金壹圓	春日 健治	金壹圓	宮越 常次郎
金壹圓	尾倉 一英		
合計金貳拾參圓八拾錢也			
右之通正ニ受領候也			

明治四十二年六月

發起者

林 政雄
春日 健治
宮越 常次郎
尾倉 一英

各位 御中

○四十二年度金澤醫學專門學校

十全會收入豫算書

科 目 豫 算 額

第一款 金澤醫學專門學校十全會 一、三七二、〇〇〇

第一項 特別會員寄附金 一〇五、〇〇〇

第二項 職員寄附金 一〇五、〇〇〇

第二項 通 常會員會費 一、〇九四、〇〇〇

第一目 醫學學生會費 九四四、〇〇〇

第二目 藥學生會費 一五〇、〇〇〇

第三項 入 會 金 一二〇、〇〇〇

第一目 入 會 金 一二〇、〇〇〇

第四項 利 子 金 五三、〇〇〇

第一目 預 金 利 子 五三、〇〇〇

○四十二年度金澤醫學專門學校

十全會經費豫算書

科 目 豫 算 額

第一款 金澤醫學專門學校十全會 一、三四七、〇〇〇

第一項 春季陸上運動會費 二〇八、〇〇〇

第一目 春季陸上運動會費 二〇八、〇〇〇

第二項 講 話 部 四〇、〇〇〇

第一目 大會費 三八、〇〇〇

第二目 通 常會費 二、〇〇〇

第三項 雜 誌 部 四八〇、〇〇〇

第一目 雜 誌 費 四四六、四〇〇

第二目 通 信 費 一五、六〇〇

第三目 消 耗 品 費 七、〇〇〇

第四目 製 本 費 一〇、〇〇〇

第五目 雜 費 一、〇〇〇

第四項 ロンテニス部費 七五、〇〇〇

第一目 ロンテニス部費 六〇、〇〇〇

第二目 大 會 費 一五、〇〇〇

第五項 劍 道 部 七〇、〇〇〇

第一目 大 會 費 三〇、〇〇〇

第二目 獎 勵 費 四〇、〇〇〇

第六項 柔 道 部 七二、〇〇〇

第一目 大 會 費 三二、〇〇〇

第二目 獎 勵 費 四〇、〇〇〇

第七項 弓 術 部 五五、〇〇〇

第一目 大 會 費 一五、〇〇〇

第二目 備 品 費 二〇、〇〇〇

第三目 南 山 修繕費 五、〇〇〇

第四目 獎 勵 費 五、〇〇〇

(會告)

第八項 會務

第一目 教師囑託手當費

一九四、五〇〇

第二目 備品費

二二、〇〇〇

第三目 印刷費

〇、五〇〇

第四目 消耗品費

五、〇〇〇

第五目 雜費

七、〇〇〇

第六目 茶話會費

五、〇〇〇

第九項 學術實習部

第一目 藥品材料費

八〇、〇〇〇

第二目 備品費

五〇、〇〇〇

第三目 雜費

二〇、〇〇〇

第十項 豫備費

一〇、〇〇〇

第十項 端艇基金

七二、五〇〇

第十項 端艇基金

一、〇〇〇

科	目	豫算額
第一款	新營	二五、〇〇〇
	第一項 南山修理費	二五、〇〇〇

○四十二年度金澤醫學專門學校

十全會臨時經費豫算書

○四十二年度金澤醫學專門學校十全會
校外特別會員會費收入豫算書

科

目

豫算額

第一款 金澤醫學專門學校十全會校外特別會員會費

一、一九七、四二〇

第一項 校外特別會員會費

九三五、四〇〇

第一目 四十二年度會費

三八五、四〇〇

第二目 前年度未納會費

二五〇、〇〇〇

第三目 前納會費

三〇〇、〇〇〇

第二項 利子

二六、六二〇

第一目 預金

二六、六二〇

第三項 繰越金

二三五、四〇〇

第一目 繰越金

二三五、四〇〇

第一目 雜費

二三五、四〇〇

第二目 通信費

一八、〇〇〇

第三目 雜備費

四〇、〇〇〇

第一目 豫備費

四〇、〇〇〇

第二項 維持資金(組入)

一二、八二〇

第三項 維持資金(組入)

一二、八二〇

第一目 維持資金(組入)

一二、八二〇

科	目	豫算額
第一款	金澤醫學專門學校十全會校外特別會員會費	六六二、〇二〇
第一項	校外特別會員會費	六〇九、二〇〇
第一目	雜誌費	五〇五、二〇〇
第二目	通信費	八六、〇〇〇
第三目	雜備費	一八、〇〇〇
第一目	豫備費	四〇、〇〇〇
第二項	維持資金(組入)	四〇、〇〇〇
第三項	維持資金(組入)	一二、八二〇
第一目	維持資金(組入)	一二、八二〇

○四十二年度金澤醫學專門學校十全會
校外特別會員會費支出豫算書